

第6章 総括

第1節 縄文時代の石器製作形態と空間利用形態

1 出土土器からみた遺跡形成時期

下市築地ノ峯東通第2遺跡の遺構・遺物は古代に帰属するものを中心となるものの、縄文時代の遺物も相当量確認している。とくに、黒曜石製石器が近隣の遺跡では類を見ないほど大量に出土しており、その資料的価値は非常に高いと考えられる。ここでは、主として出土石器を中心に検討し、縄文時代における下市築地ノ峯東通第2遺跡の利用のあり方について総括を行っておきたい。

第4章第3節で報告したとおり、出土した総数2,222点の縄文土器のうち、早期末から前期初頭にかけての土器が約93%を占めている。そのうち、型式が判断できるものは、西川津式(井上1991)が主体となり、そのほかに西川津式の直前型式の長山式(井上1991)も少量ながら出土している。また、胎土への繊維混入が確認できる縄文地と条痕地の体部片も長山式に帰属する可能性がある。ただし、後者については西川津式土器にも繊維混入が認められる個体が含まれているため、両者の判断が付かないものが多い。西川津式土器はすべてA類(井上1991)に分類できる。長山式土器の口縁部片は本調査では新段階のもののみが出土しているが、確認調査で古段階の口縁部片が1点出土しているほか(鳥取県埋蔵文化財センター 2011b)、縄文地の体部片の多くは長山式古段階に帰属する可能性が高い¹⁾。そのほかに、羽島下層I式と考えられる刺突文土器も数点出土している。このように、本遺跡の縄文土器は早期末から前期初頭のもものが主体となる。

遺物だけでなく、縄文時代の遺構もすべて前期初頭のものと考えており、この時期には遺構が形成されるような生活域となっていたといえる。ちなみに、大規模な削平が行われている1区には、検出した以外にも本来は遺構が存在していた可能性が考えられる。

こうした状況からは、大量に出土した石器のほとんどは早期末から前期初頭に帰属する可能性が高いと考えられる。

2 縄文時代早期末～前期初頭の石器製作形態

(1) 石材・器種組成の特徴

本遺跡で出土した石器は総数4,772点に上る。その約95%までが黒曜石製で、本石器群の大きな特徴となっている。黒曜石は産地同定分析を行ったものはすべて隠岐久見産であった(第7章第2節参照)。黒曜石以外には、サヌカイトやサヌカイト類似岩などの安山岩が打製石器に用いられているほか、粗粒軟質安山岩が礫石器に、頁岩と凝灰岩が磨製石器に用いられている。打製石器の石材別重量では、黒曜石が9390.34 g、安山岩が473.33 g、流紋岩が2.40 gと、黒曜石が圧倒的に多い。

縄文時代を通して、山陰地方中部では隠岐産黒曜石が打製石器に多用されることが確認されている。なかでも早期末から前期にかけては石器群に占める黒曜石の割合が非常に高く、その出土量が多いことが明らかにされている(稲田1992、会下2002、濱1999)。早期末から前期初頭の遺跡で黒曜石製石器の出土量が多いという一般的傾向と、出土土器の構成から見れば、本遺跡石器群の時期は早期末から前期初頭にほぼ限定してもよさそうである。

石器群の中心となる黒曜石製石器では、剥片・碎片が組成の中心となるほか、石核やブランクも多

く含まれており、石器製作に伴う残滓類の組成率が高い(表9)。また、両極剥離痕のある石器の多くは剥片剥離を行った石核と考えているので(鳥取県埋蔵文化財センター 2011a)、これも石器製作に伴う残滓類に含まれるだろう。これらの残滓類の合計は4194点で、黒曜石石器全体の92%を占めている。このように、石器製作に伴う残滓類が器種組成の主体となることから、本遺跡の黒曜石を主体とする石器群は、主として遺跡内での石器製作によって残されたと考えて間違いない。

残滓類以外の定形器種では石鏃が主体となる。次に多いのがスクレイパーで、まとまった量が見られる。また、少量ながら石錐や尖頭器も組成している。こうした定形器種の組成からは、本遺跡では石鏃を主体としながら、スクレイパーもまとまった量を製作していたと考えられる。

以上のように、本遺跡では縄文時代早期末から前期初頭に、黒曜石を用いた石器製作が盛んに行われていたと考えられる。

(2) 黒曜石製石器の製作形態

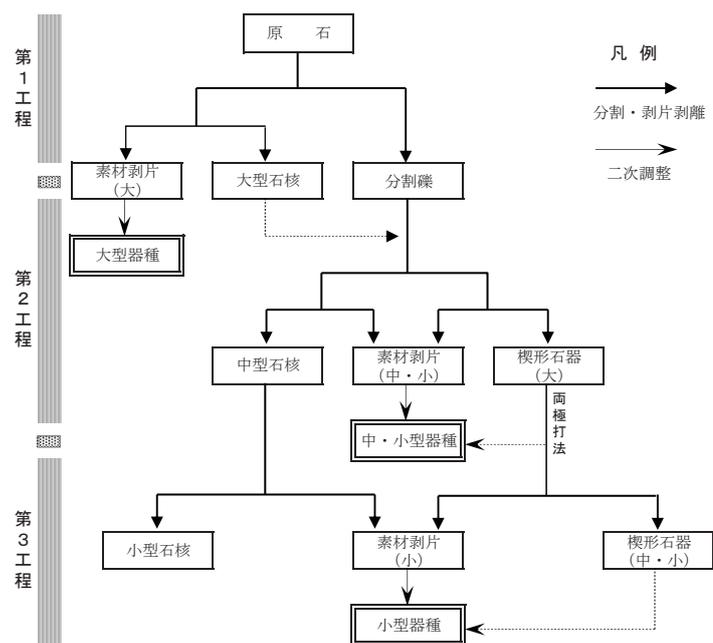
それでは、本遺跡で行われた黒曜石を用いた石器製作の具体的な内容を、石材の消費過程に沿って確認していきたい。

遺跡内からは原石は出土しておらず、原石状態で遺跡に黒曜石が搬入されていたかどうかは判然としない。出土したブランクや石核のなかには原礫面を残すものが見られる他に、原礫面残存率が非常に高い剥片も少量は確認できるため、拳大程度 of 原石が多少は搬入されていた可能性もあるかもしれない。しかしながら、確実に遺跡内で原石の分割を行ったと確認できる資料が見られないため、基本的にはブランク、石核、大型剥片の状態で黒曜石を遺跡に搬入したものと考えておきたい。

出土した石核の大きさには幅がある。簡単にその技術的な特徴をまとめると、石刃技法のような立体的な剥片剥離を行っておらず、石核表面から面的な剥片剥離を行うものが主体となる。大振りのものである、石核の最も広い面を1面ないしは2面の作業面とし、数枚の剥片を剥離している。小型のものでは、打面転移を行うものも見られるが、その場合でも基本的に各作業面の表面で2、3枚程度の剥片剥離しか行っていない。剥離が進行して小型となった石核のなかには、

両極打法が用いられて両極剥離痕のある石器(楔形石器)へと移行したのも多かったと考えられる。両極剥離痕のある石器の場合も、石器の表裏両面を面的に剥離し、小型の剥片を各面2・3枚程度作出しているの、石核と基本的には同じ剥離の特徴をもっている。

大ぶりな石核からは中型スクレイパー(長さ3cm~5cm未満)に使用しうる大きさの剥片が得られているが、大半は石鏃や小型スクレイパー(長さ3cm未満)などの小型器種の素材剥片が剥離されたものと考えられる。小型石



第264図 石器製作工程模式図

核や両極剥離痕のある石器の場合も小型器種の素材しか作出しえなかったと考えられる。大型スクレイパー(長さ5cm以上)のなかには、ブランクや石核の分割・調整に伴う剥片や、石核やブランク自体を素材として用いた可能性がある資料も見られるので、その一部については遺跡内で素材作出が行われた可能性がある。一方で、特に大型のS47やS55については、かなり大型の石核から作出された剥片を素材としている可能性が考えられるので、残された石核からは遺跡内で素材供給が行われた可能性は低だろう。したがって、これらについては製品として搬入したか、大型剥片を搬入して遺跡内で調整を施したかのいずれかであろう。このように、遺跡内で行われた剥片剥離作業は基本的に中・小型器種の素材剥片作出にあったと考えられる。

こうして得られた剥片は、二次調整が施され、石鏃やスクレイパーなどに加工されている。剥片剥離の特徴からも分かるように、定型的な素材剥片は得られていないため、石鏃の場合は二次調整による素材改変度が極めて高かったと考えられる。一方のスクレイパーは、素材形態を大きく変えていないため、形態的なバラエティーが大きくなっている。

さて、このような黒曜石製石器の製作工程を概念的に整理したのが、第264図である(北2005)。この工程模式図では石材の消費段階で工程を3段階に分けて捉えている。本石器群をこの模式図に示した第2工程以降の石器製作が確認できる。

(3) 周辺遺跡との比較

本遺跡での石器製作形態の特質を明らかにするため、周辺の同時代遺跡での石器製作形態と比較してみたい。対象とする遺跡は鳥取県西部に所在する遺跡のうち、石器製作の内容が検討しうるだけの石器の出土量があり、十分な報告が行われている西伯郡大山町西坪上高尾原遺跡(鳥取県埋蔵文化財センター 2011a)、名和飛田遺跡((財)鳥取県教育文化財団2005)、西伯郡伯耆町長山馬籠遺跡(溝口町教育委員会1989)の3遺跡である。

表94に示したように、いずれの遺跡の土器群とも長山式か西川津式を主体とする。石器石材はすべての遺跡で黒曜石が9割以上を占めており、黒曜石へと著しく傾斜した石材利用状況を確認できる。石器総数や残滓類の点数からは、すべての遺跡で盛んな石器製作が行われていたことが推測される。黒曜石製石器の出土点数では西坪上高尾原遺跡が最も多いが、総重量は3898.14gで、点数では半数以下となる下市築地ノ峯東通第2遺跡の総重量の半分以下である。これは、両者の調査方法の違いに起因する外的な要因と、出土石器自体の大きさが異なっていることによる内的な要因のいずれもが関

表94 周辺遺跡の石器組成

遺跡名	石器点数(礫石器以外)					主要器種点数		黒曜石組成率*	遺跡内で行われた石器製作工程段階*	早期末～前期初頭の土器型式と土器点数*
	総数	器種	石核・ブランク	両極剥離痕のある石器	剥片・碎片	石鏃	スクレイパー			
下市築地ノ峯東通第2遺跡	4664	381	173	154	3956	89	52	97%	第2工程以降	長山式<西川津式 2072点
西坪上高尾原遺跡	11724	431	64	93	11134	131	28	99.6%	第3工程	長山式～西川津式 約350点
名和飛田遺跡(A・B・C区)	5484	381	83	128	5020	104	53	96%	第2工程以降	長山式>西川津式 3155点
長山馬籠遺跡	10261	452	80	6	9729	120	4*	94%	第2工程以降	長山式>西川津式 約2400点

*黒曜石組成率は礫石器以外の石器での黒曜石製石器の割合。

*工程段階は遺跡内で主体となると想定した段階を示した。

*土器型式は早期末～前期初頭のもののみを示した。土器数はこの時期幅に含まれる土器の破片数のみを計数している。

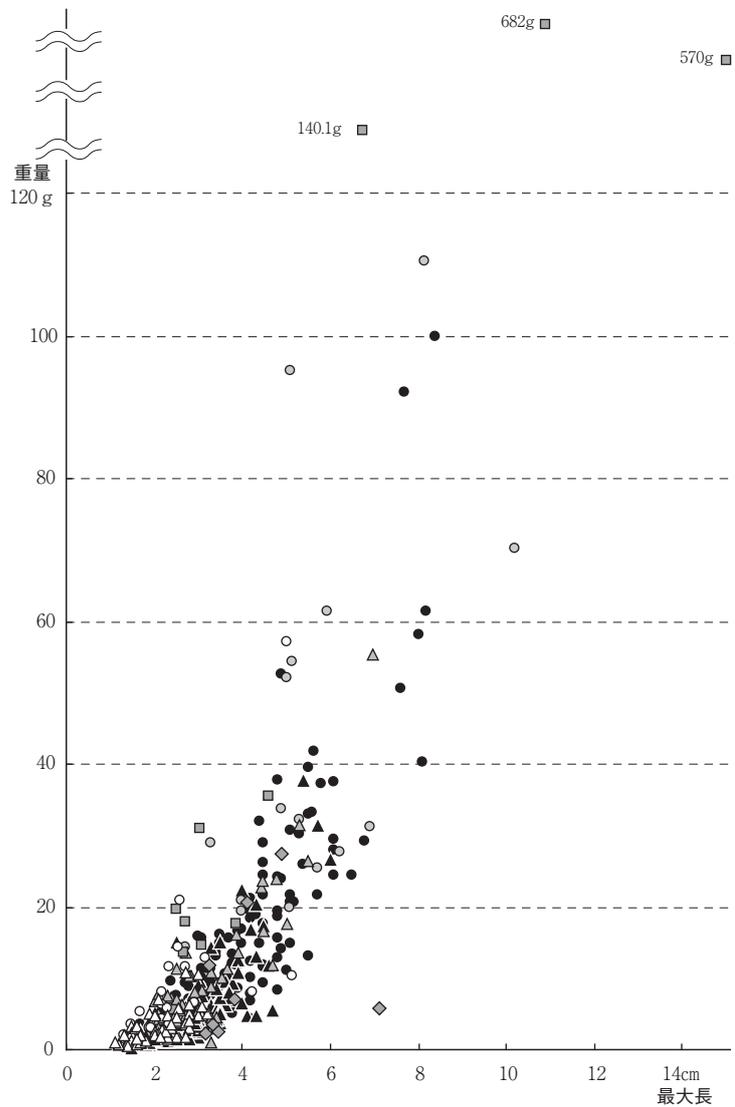
*長山馬籠遺跡のスクレイパー点数には石鏃として報告されている1点(p.168:520)を含めた。

連していると考えている²⁾。実態としては重量に見られるように、西坪上高尾原遺跡の方が下市築地ノ峯東通第2遺跡よりも石器の総出土量が少ないと判断すべきであろう。また、重量の総計は不明ながら、出土点数で判断すると名和飛田遺跡A～C区でも下市築地ノ峯東通第2遺跡と同程度の石器出土量がある。長山馬籠遺跡も遺物回収率が比較的高いようであるが、それを差し引いても相当量の石器製作が行われたことが窺える。

このようにいずれの遺跡でも石器製作量がかなり多かったことが推測できる。では、遺跡内での石器製作のあり方はどのような内容であったのか、主として出土石器の法量から検討してみたい。なお、ここで行う分析の大半は、すでに西坪上高尾原遺跡の報告書で行われた詳細な分析にデータを追加したもので、下市築地ノ峯東通第2遺跡以外の遺跡の評価にも大きな変更点はない(加藤・長尾2011)。これもあわせて参照されたい。

まず、石核類の法量を比較してみたい。ここでは石核だけでなく、両極剥離痕のある石器もあわせて分析した(第265図)。

この図からは、石核類の法量分布のあり方が遺跡間で異なっていることが分かる。下市築地ノ峯東通第2遺跡、名和飛田遺跡、長山馬籠遺跡では重量約20g以上、最大長約5cm以上の中・大型の石核類が多く見られるのに対し、西坪上高尾原遺跡では1点のみしか確認できない。また、それ以下の法量を示す小型のものを見ても、西坪上高尾原遺跡とそれ以外で分布が異なっていることが分かる。つまり、西坪上高尾原遺跡の石核類はかなり小型のもののみで構成されていることが分かる。下市築地ノ峯東通第2遺跡と名和飛田遺跡の石核類の法量分布はよく類似しており、小型のものから重量100g超のものまで、様々なサイズのものが一定数見られる。長山馬籠遺跡は小型のものから重量約40gまでの中型のものまでは満遍なく構成されているものの、40g以上100g以下の石核類は見られず、140gや500g超といった大型石核が存在する。ま



凡例 下市築地ノ峯東通第2遺跡 ●：石核 ▲：両極剥離痕のある石器
 西坪上高尾原遺跡 ○：石核 △：両極剥離痕のある石器
 名和飛田遺跡 ○：石核 △：両極剥離痕のある石器
 長山馬籠遺跡 ■：石核 ◆：両極剥離痕のある石器

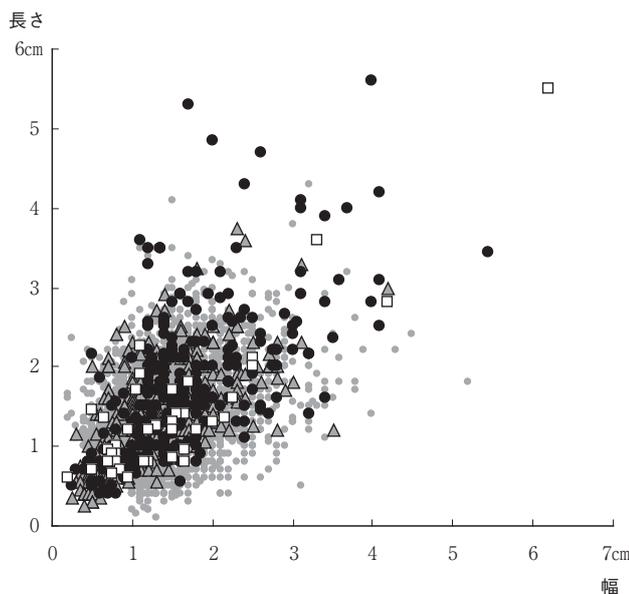
第265図 黒曜石製石核類の法量分布

た、各遺跡とも相対的に小型の法量を示す分布域では両極剥離痕のある石器が中心となっている。これは、すでに述べたように、剥離が進行した石核や、素材が小型の石核は両極打法によって剥片剥離がなされたことを示している(加藤・長尾2011)。両極剥離痕のある石器の法量の場合も、西坪上高尾原遺跡が他の遺跡より小型のもので構成されていることが分かる。以上のように、下市築地ノ峯東通第2遺跡、名和飛田遺跡、長山馬籠遺跡の3遺跡と西坪上高尾原遺跡では石核類のサイズに大きな差があることが確認できた。これは端的に両者間の石器製作内容の違いを示していると考えられる。また、下市築地ノ峯東通第2遺跡、名和飛田遺跡の2遺跡と、長山馬籠遺跡との間でも石核構成に差があり、石材の搬入形態や石器製作の内容が多少異なっていたと考えられる(稲田2005)。

このように石核類に遺跡間での明確なサイズの違いが見られる以上、作出された剥片も遺跡間で異なっているはずである。そこで、剥片の法量が報告されている西坪上高尾原遺跡と本遺跡の剥片を比較してみた(表95、第266・267図)。

西坪上高尾原遺跡では出土した全ての剥片の法量が報告されているが、本遺跡の剥片は全点計測ができなかったため、出土地区・層位を違えて無作為に抽出したサンプルを計測した。剥片の法量比較にあたっては、両遺跡での石器回収率の差がかなり大きなノイズとなる。特に碎片や小型剥片の回収率には無視できない差が生じているようである。その点を考慮する必要があるものの、統計値を見ると下市築地ノ峯東通第2遺跡が西坪上高尾原遺跡より大きな値を示している(表95)。ノイズを考慮する必要のない最大値では、下市築地ノ峯東通第2遺跡が確実に大きな値を示しており、全点を計測すればこれよりも大きな値も得られるだろう。

長さと幅を軸にとった散布図(第266図)では、長幅約3cm以内の範囲(以下、小型剥片と呼ぶ)に分布が両遺跡とも集中している。その一方で、小型剥片の集中範囲を超える部分(以下、長さまたは幅が5cm未満を中型、それ以上を大型剥片と呼ぶ)では、遺跡間で分布が異なっ



凡例
 下市築地ノ峯東通第2遺跡 (剥片・碎片サンプル n=676)
 ▲ 1区 耕作土 ● 1区 縄文流路 □ 2区 縄文包含層
 ● 西坪上高尾原遺跡 (剥片のみ全点 n=5230)

第266図 黒曜石製剥片の法量分布

表95 黒曜石製剥片・碎片の法量統計値

遺跡	器種	計測資料種別	統計種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
下市築地ノ峯東通第2遺跡	剥片のみ	1区耕作土 (n=267)	平均値	1.555	1.507	0.389	0.830
		1区縄文流路 (n=243)		1.882	1.772	0.480	1.752
		2区縄文包含層 (n=30)		1.625	1.763	0.370	1.774
		サンプル全体 (n=540)		1.706	1.641	0.428	1.297
		中央値		1.20	1.40	0.30	0.33
		最大値	5.60	6.20	3.30	29.29	
	剥片 碎片	1区耕作土 (n=358)	平均値	1.326	1.287	0.323	0.651
		1区縄文流路 (n=277)		1.737	1.636	0.437	1.555
		2区縄文包含層 (n=41)		1.391	1.473	0.311	1.314
		サンプル全体 (n=676)		1.498	1.442	0.369	1.056
遺跡全量 (n=3867)		-		-	-	0.970	
西坪上高尾原遺跡			平均値	1.321	1.278	0.313	0.479
剥片のみ (n=5230)			中央値	1.20	1.20	0.29	0.27
			最大値	5.20	4.30	3.00	12.47

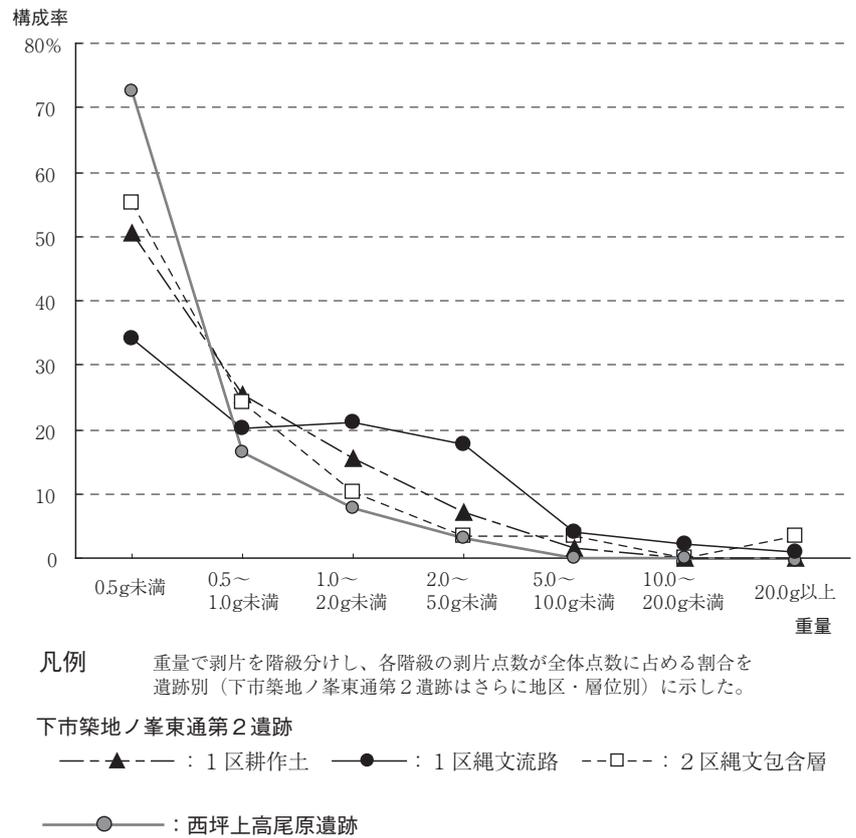
ている。西坪上高尾原遺跡では大型剥片が1点のみしか存在せず、中型剥片の相対量が少ないのに対し、下市築地ノ峯東通第2遺跡では中型から大型までの剥片が満遍なく構成されている。下市築地ノ峯東通第2遺跡の場合はサンプル数が全体量の5分の1程度なので、それを踏まえれば西坪上高尾原遺跡との中・大型剥片の構成量の差は明らかであろう。

また、剥片重量の構成からも同様に、下市築地ノ峯東通第2遺跡の方が西坪上高尾原遺跡よりも大型の剥片を多く組成していることが分かる(第267図)。このように、作出された剥片のサイズが両遺跡で異なっていた

ことが分かる。石核のサイズとあわせて考えると、製作された石器器種素材剥片の大きさに差があったものと考えられる。なお、両遺跡で組成の中心となる小型剥片は、両遺跡の主体器種である石鏃の素材やその製作に伴う残滓類が主体になるだろう。

製作された器種のなかで、そのサイズが素材剥片の形態に最も規定されやすいのがスクレイパーと考えられる。全遺跡で製作主体となる石鏃は機能的に規定されたサイズや形態を大きく逸脱しないのに対し、スクレイパーは1遺跡内でもサイズや形態にバラエティーが非常に大きく、遺跡内での石器製作のあり方を良く反映する可能性が高い³⁾。そこで、遺跡間でスクレイパーの法量比較を行った(第268図)。これを見ると、下市築地ノ峯東通第2遺跡と名和飛田遺跡の2遺跡と西坪上高尾原遺跡との大きな差が確認できる。西坪上高尾原遺跡は、ほぼ、最大長3cm未満、重量3g未満の小型スクレイパーのみで構成されている。例外的に1点存在する大型スクレイパーは遺跡で製作した可能性が極めて低く(鳥取県埋蔵文化財センター2011a)、石核素材として遺跡内に搬入された可能性も考えられる。下市築地ノ峯東通第2遺跡と名和飛田遺跡では中・大型とも一定量出土しており、その法量構成のあり方も漸移的で、とくに大型のもの以外は遺跡内での製作を想定可能であろう。長山馬籠遺跡は出土点数が少なく不明点が多いが、中・大型スクレイパーのみで構成されており、基本的には下市築地ノ峯東通第2遺跡や名和飛田遺跡に近いあり方である。ただし、その点数の少なさは長山馬籠遺跡と下市築地ノ峯東通第2遺跡などとの石器製作形態の種差性を反映している可能性が高い。このように、スクレイパーの法量分析の結果は、剥片の分析結果と非常に整合的である。

さて、以上の分析から、各遺跡の石器製作形態を考えてみたい。下市築地ノ峯東通第2遺跡と名和飛田遺跡は極めて近似した石器製作が行われていたと考えられる。両遺跡とも第264図の工程段階で



第267図 黒曜石製剥片の重量構成

は第2工程以降が盛んに行われていたと考えられる。長山馬籠遺跡の場合は、出土石核類のあり方からみて第2工程が行われていた可能性は高いが、下市築地ノ峯東通第2遺跡や名和飛田遺跡よりは第2工程の作業量が少なかった可能性がある。長山馬籠遺跡はここで検討した遺跡のなかで最も内陸に位置し、その地理的環境から石材消費の進んだ状態の石器群が残された可能性が高い(稲田2005)。それが遺跡への黒曜石素材搬入形態によるものなのか(稲田2005)、遺跡内で石材消費を儉約的に行った結果なのかなお検討が必要であろう。いずれにしても、長山馬籠遺跡は第2工程以降の石器製作を行っていたと考えておきたい。これらの遺跡に対し、西坪上高尾原遺跡は第3工程の石器製作が行われたと考えられる(加藤・長尾2011)。

こうした遺跡間での石器製作形態の違いは各遺跡の居住形態の違いに関連しており、第2工程が発現する遺跡は定着性・拠点性の高い居住地、第3工程が発現する遺跡はそれが低い居住地であったと考えた(北2005)。こうした理解に

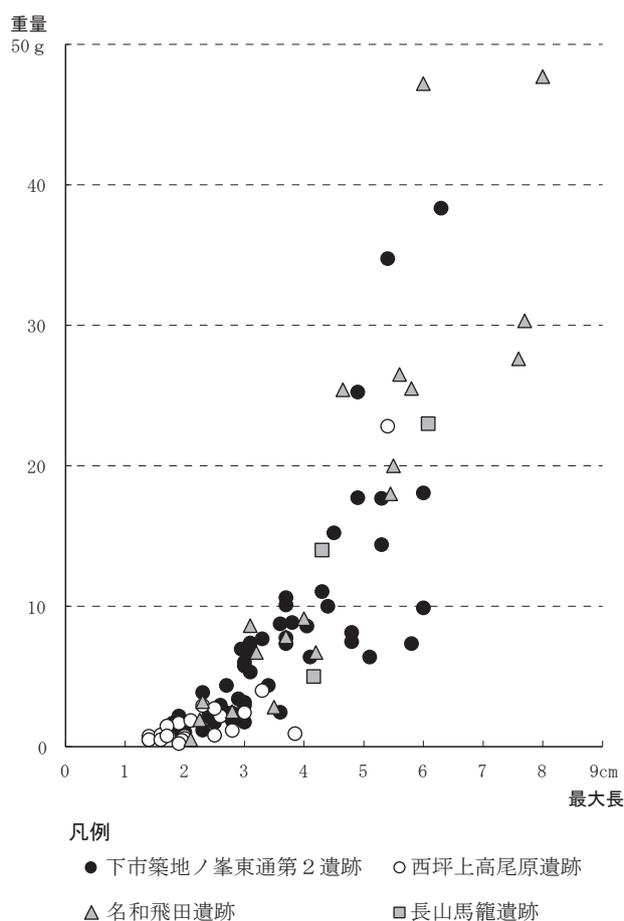
立てば、下市築地ノ峯東通第2遺跡は名和飛田遺跡とおおむね同等の定着性・拠点性のある居住地であったと考えられる。実際、下市築地ノ峯東通第2遺跡では、包含層の大半が失われた可能性が高いにもかかわらず、名和飛田遺跡と遜色ない量の土器が出土している(表94)。遺構はわずかし確認できていないので、遺構が数多く見つかった名和飛田遺跡に比せばその定着性・拠点性は低くなるかもしれない。しかしながら、1区平坦面の大半が大きく削平されていることを考えると、本来は相当数の遺構が存在した可能性もあろう。それに対し、西坪上高尾原遺跡は出土土器数が少なく、遺構も確認されていない。西坪上高尾原遺跡は短期間に反復利用された、狩猟活動を主たる目的としたキャンプサイトとして評価できるだろう(加藤・長尾2011)。こうした機能差をもった居住地が並存することが、当該期の居住形態の特徴と考えられる。

3 空間利用から見た居住形態

(1) 遺跡群内での空間利用

石器製作形態から推測した居住形態を空間利用のあり方からも確認しておきたい。

第4章でも確認したように、下市築地ノ峯東通第2遺跡では遺物・遺構の分布が地区・地形によって異なっている。その特徴を改めてまとめると、1区平坦面には大量の早期末から前期初頭の土器や石器の集中が見られるほか、遺構も確認している。それに対し、2区での早期末から前期初頭土器の分布は、丘陵テラス部で少量確認したに留まる。2区の石器分布は、テラス部に集中が認められ、



第268図 黒曜石製スクレイパーの法量分布

第6章 総括

200点以上の石器が出土している。なお、2区テラス部からは後晩期の粗製土器も一定量出土しているため、テラス部の石器には後期以降のものも含まれている可能性があるものの、遺跡全体の石器のあり方から見て、その多くは早期末から前期初頭のものと考えておきたい。

1区と2区での黒曜石製石器器種数の組成には大きな違いは見られないものの、両者の石器製作の内容は異なっていた可能性が高い。表95、図266・267に示した剥片の法量からは、2区テラス部の剥片が1区よりも小さいことが明瞭に分かる。また、下市築地ノ峯東通第2遺跡2区の剥片は西坪上高尾原遺跡に近似した傾向も読み取れよう。したがって、2区テラス部では西坪上高尾原遺跡と同等の石器製作、すなわち第3工程が中心に行われていた可能性がある。ただし、2区からは9点の黒曜石製石核が出土しており、そのうち3点(S102・S118・S119)は中型石核である。これらの石核の剥離痕からは中型以下の剥片が作出されたと考えられる。この剥片剥離が2区で行われたかどうかは確定できないが、2区出土剥片の法量からみて、これらの石核の整形に伴う作業は行っていないようである。これらの中型石核は、1区での石核整形や、場合によっては中型剥片作出を経てから2区に搬入され、主として石鏃素材を製作した可能性が高い。このように、2区では僅かに第2工程を含む可能性があるものの、基本的には第3工程が行われたと考えられる。また、2区テラス部では礫石器が集中して出土しており、この場所での植物加工に関わる生業活動も推定できよう。

このように、下市築地ノ峯東通第2遺跡の1区平坦面と2区丘陵テラス部では石器製作の内容、遺構のあり方、土器の出土量などに違いが見られる。したがって、地形によって空間利用形態が異なっていたと考えられる。

下市築地ノ峯東通第2遺跡は、今回の調査以前に中山町教育委員会による発掘調査が行われており、丘陵の頂部にあたるA区から縄文時代の時代の遺物が確認されている(中山町教育委員会2002)(第4章第25図参照)。A区出土の縄文土器は、2区同様、早期末から前期初頭のものと同様の粗製土器が見られる。相対量は前者の方が多いものの、その数は十数点ほどと少ない。一方、石器は総数648点とまとまった量が出土している(北2009)。石器石材は黒曜石が97%を占めており、1区・2区と同様の石材構成である。これらの点から、石器の大半は早期末から前期初頭に属するものと推定できよう。打製石器の定形器種は18点の石鏃を主体とし、サヌカイト製のスクレイパー(石匙)が1点のみ見られる。石器組成に占める黒曜石製の剥片・碎片の割合が極めて高く、石核も出土しているので、A区でも石器製作が行われていたことは確実であろう。A区の剥片のうち報告されたもの(加工痕のある剥片も含む)はすべて小型に分類できる法量で、報告されていないものもほとんどが小型剥片である。したがって、A区でも第3工程に相当する石器製作が行われていた可能性が高い。

このように下市築地ノ峯東通第2遺跡では、谷底低地、丘陵中腹のテラス、丘陵上の3箇所縄文時代早期末から前期初頭の活動域が形成されている。それぞれの活動域では、遺構の有無、土器の出土量、石器製作形態が異なっており、空間利用形態に違いがあったと推定できよう。低地の1区が主たる生活空間にあたり、丘陵地の2区やA区は派生的に形成された活動空間であった可能性が高い。

また、下市築地ノ峯東通第2遺跡の西隣の丘陵の西側中位段丘面に立地する下市前築地遺跡では、早期から前期中葉を中心とする縄文土器が約300点出土している(鳥取県埋蔵文化財センター2012)。そのなかには早期末から前期初頭の土器も一定量含まれており、下市築地ノ峯東通第2遺跡との関連性が考えられる。この遺跡でも遺構は確認されておらず、土器の数もそれほど多くないことから、下市築地ノ峯東通第2遺跡から派生したキャンプサイトとして捉えることが可能だろう。

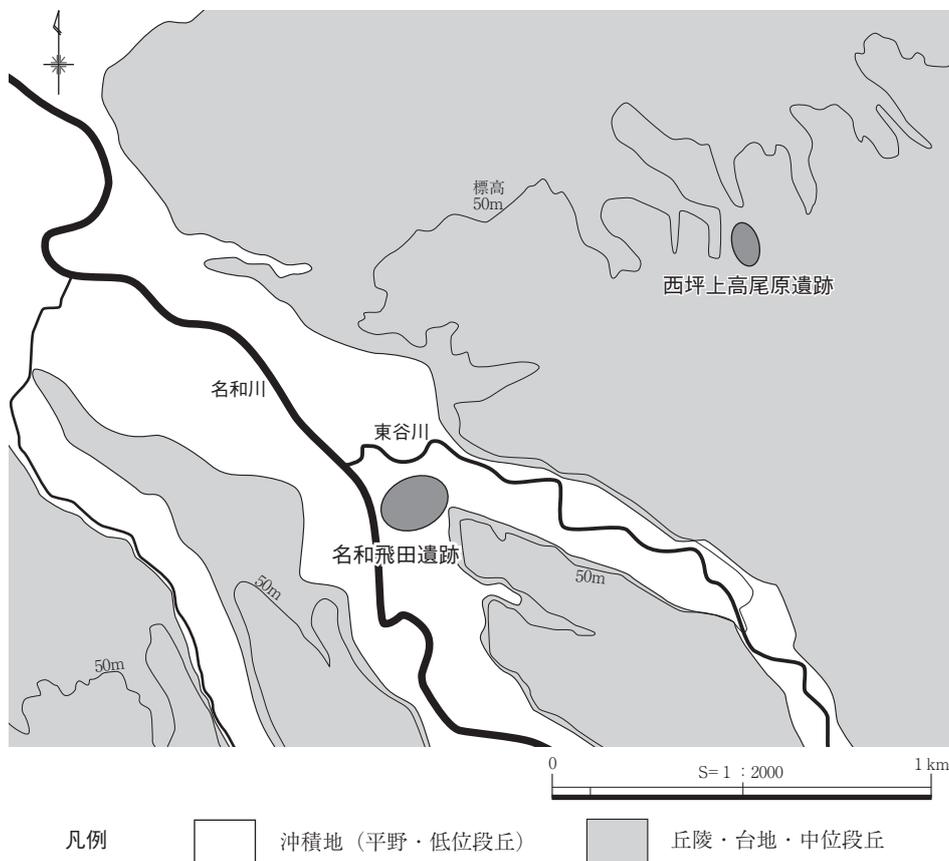
(2) 関連遺跡の立地

名和飛田遺跡と西坪上高尾原遺跡の関係も、下市築地ノ峯東通第2遺跡の遺跡内での関係や下市前築地遺跡との関係と類似している。名和飛田遺跡と西坪上高尾原遺跡は直線距離にして約1.1km離れており、前者が名和川東岸の低位段丘に、後者が丘陵上に立地している(第269図)。すでに述べたように、名和飛田遺跡は拠点性・定着性の高い居住地、西坪上高尾原遺跡は反復利用されたキャンプサイトとして捉えられる。この両者の関係からも、下市築地ノ峯東通第2遺跡周辺で見られたような、低地に主たる生活空間を構え、丘陵地に派生的な活動空間を形成するという状況が確認できよう。

また、長山馬籠遺跡も下市築地ノ峯東通第2遺跡や名和飛田遺跡に近い石器製作形態をもち、土器が大量に出土しているだけでなく、竪穴状遺構や多数の土坑が検出されていることから、拠点性・定着性の高い居住地と評価できる。長山馬籠遺跡も低位段丘面に立地しており、山がちな周辺地形のなかではとくに標高が低く、川べりにあたる地形を選んでいるようである。

このように、低地に拠点的居住地を形成し、丘陵地にキャンプサイトを形成するあり方が、空間利用の特徴として捉えられた。これが山陰地方における早期末から前期初頭の空間利用形態・居住形態の一般的な傾向となるのかどうかは、今後類例の増加とともに検証が必要と考えられるものの、検討した地域ではその蓋然性が高いと考えている。また、この2種類の遺跡が同時に存在したものか、季節的移動によって残されたものなのかといったセトルメントパターンの検討も今後必要となるだろう。

以上の検討から、下市築地ノ峯東通第2遺跡は、谷底低地に拠点性・定着性の高い居住地が営まれていたと評価できよう。また、他の遺跡では遺跡間関係として現われるような空間利用形態の差が1



第269図 名和飛田遺跡と西坪上高尾原遺跡の立地

第6章 総括

遺跡内で発現する特徴をもつことも明らかにできた。これは、遺跡周辺の複雑な地形条件によって生じた資源環境の多様性を、本遺跡の居住集団が積極的に利用した結果として現われたものと考えておきたい。拠点居住地から至近距離内でこうした機能差をもった空間利用を実現している点からも、居住地としての安定性や定着性の高さを窺い知ることができよう。

【註】

- 1) 長山式古段階と長山式新段階は、隆帯形態などから長山式の時期的細分を行ったもので(北 2005)、近年、その型式名が定着しつつある小林青樹氏の福呂式、長山馬籠式(小林 2000)の関係にある程度対応するものと考えている。ただし筆者は小林氏設定の両型式は型式設定の方法に問題があることと、実体として「型式」を設定可能なほどの内容を伴わないと考えて、一型式内の段階差と捉えている(北 2005)。
- 2) 後者については以下に行なう分析によって明らかにしたいが、前者の要因についても確認しておく必要がある。西坪上高尾原遺跡では原則全遺物の出土位置の記録を実施しているため、極めて精密な掘り下げが行われており、石器の回収率が非常に高い。それに対して本遺跡では、ジョレン・クワと移植ゴテを併用した一般的な方法による包含層掘削の過程で石器を回収しているので、回収率が低いと考えられる。ちなみに、名和飛田遺跡の掘り下げ方法も下市築地ノ峯東通第2遺跡とほぼ同じなので、遺物回収率も同程度と推測できる。長山馬籠遺跡では西坪上高尾原遺跡ほどではないと考えられるが、かなり精密な掘り下げが行われており、回収率は高いと考えられる。
- 3) なお、主要器種の石鏃の場合も素材剥片の大きさが製品の大きさに僅かに影響することが確認されており(加藤・長尾 2011)、本遺跡の石鏃も西坪上高尾原遺跡のものより僅かに大きく、名和飛田遺跡とほぼ同じ大きさである。ただし、このサイズの違いは平均長が2～3mm程度異なっているに過ぎないのでほとんど違いがないとみてよいレベルのものであろう。

【引用参考文献】

- 稲田孝司1992「狩りと採集に生きた人々」『新版古代の日本』第4巻 中国・四国 角川書店
- 稲田陽介2005「山陰地方における縄文時代前期の石器製作技術構造」『鳥根考古学会誌』第22集 鳥根考古学会
- 井上智博1991「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相 - 中国地方を中心として - 」『考古学研究』第38巻第2号 考古学研究会
- 会下和宏2002「山陰地方における縄文～弥生時代の打製石鏃について」『鳥根大学構内遺跡第11次調査(橋縄手地区2)』鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター
- 加藤裕一・長尾かおり2011「西坪上高尾原遺跡における縄文時代の石器製作」『西坪上高尾原遺跡・西坪下馬駄ヶ峰遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター
- 北浩明2005「縄文時代早期末・前期初頭の土器と石器について」『名和飛田遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
- 北浩明2009「第二節 縄文時代」『新修中山町誌』大山町
- 小林青樹2000「縄文時代早期末葉から前期前葉土器群に関する問題」『福呂遺跡 I』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 財団法人鳥取県教育文化財団2005『名和飛田遺跡』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2011a『西坪上高尾原遺跡・西坪下馬駄ヶ峰遺跡』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2011b『樋口西野末遺跡・下市天神ノ峯遺跡』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2012『松河原上奥田第2遺跡・下市前築地遺跡』
- 中山町教育委員会2002『下市築地ノ峯東通第2遺跡・下市築地ノ峯東通第3遺跡』
- 濱隆造1999「米子平野周辺における縄文時代の石器利用について」『古市遺跡群 I』財団法人鳥取県教育文化財団
- 溝口町教育委員会1989『長山馬籠遺跡』

第2節 須恵器の生産形態

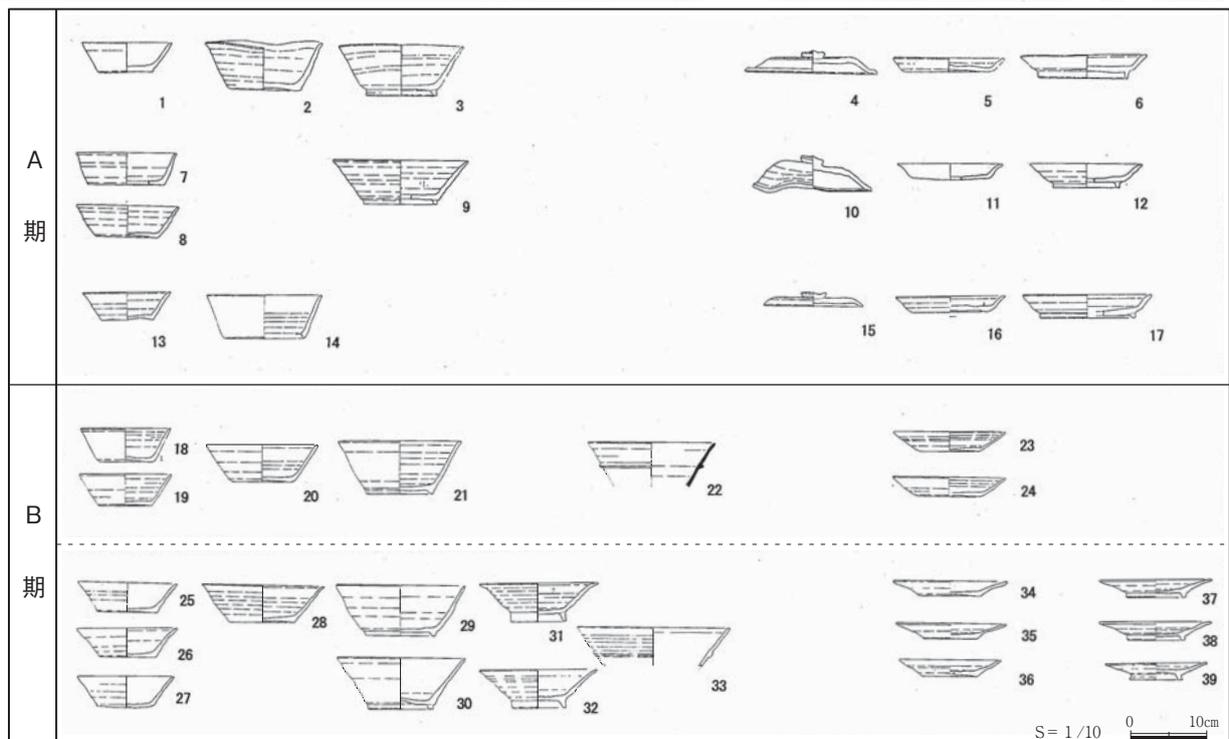
1 須恵器の時期と製作技術

(1) 出土須恵器の編年的位置づけ(第270・271図)

第5章で述べたように、須恵器窯関連遺構群出土の須恵器はほとんど形態差がなく、同一型式のものと考えられる。これらの須恵器は、器種構成と形態の特徴から編年的な位置づけが可能である。

まず、器種構成では、杯蓋が存在しない可能性が高いことが時期的位置づけの最も大きな指標となる。また、皿の形式構成では、底径の大きな高台皿がまったく見られない一方、底径の小さい高台皿がわずかながら組成している点が時期決定の指標となるだろう。形態的には、杯皿類の口径に対する底径の比率が小さく、体部が開いて立ち上がる点や、高台杯の高台貼り付け位置が底面端に寄っている点などが時期を特定する上で重要な特徴であろう。こうした特徴を既存の編年に当てはめれば、平安時代前期に相当する高広編年V期(足立・丹羽野1984)にあたる。さらに、高広編年V期は丹羽野編年(丹羽野2005)ではA期・B期の2時期に細分されており、これに当てはめればB期に相当するものと考えられる(第270図)。なお、近年発表された出雲地方の古代須恵器の通時編年でも、平安時代に関しては丹羽野編年と同様の変遷が示されており、丹羽野編年A期が出雲VA期に、B期が出雲VB期に相当する(岡田ほか2010)。

丹羽野編年B期は、実年代では9世紀後半から10世紀はじめごろと推定されている(丹羽野2005)。また、岡田編年では出雲VB期は、9世紀中葉から後葉と推定されている(岡田ほか2010)。本遺跡での放射性炭素年代測定値でも、これらと齟齬のない暦年較正值が得られている。ここでは、丹羽野編年B期の年代を、大まかに9世紀後半と捉えておきたい。



1～6：木舟1号窯跡(丹羽野2004) 7～12：小松古窯跡(宍道町教育委員会1983) 13～17：門生黒谷1号窯(鳥根県教育委員会1998b)
18～24：洪山池須恵器窯1(鳥根県教育委員会1997) 25～39：古曾志平迫田3号窯跡(鳥根県教育委員会1989)

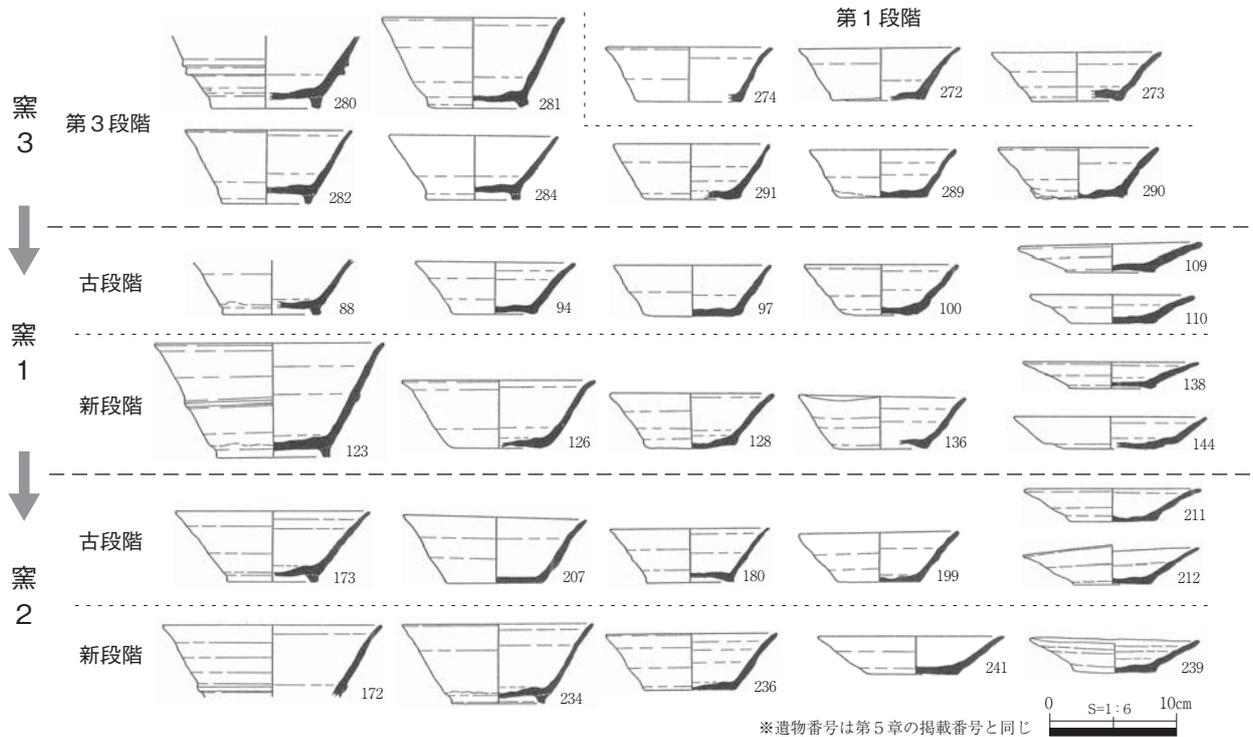
第270図 出雲地方の平安時代須恵器編年(丹羽野2005)

さて、本須恵器窯関連遺構群出土の須恵器は同一型式、同一編年段階にあると捉えたものの、実際には既に報告したとおり、3つの窯が同時に操業していた可能性は低い。

まず、これらの窯は位置的に近接しており、少なくとも窯1と窯2、窯2と窯3がそれぞれ同時に存在していた可能性は低い。また、3つの窯は構造に違いが存在し、窯1・2が礫積み側壁をもつ半地下式天井架構式窖窯、窯3が地下窯体掘り抜き式窖窯で、焼成器種の違いなど機能差の可能性も考えられるものの、構築の時期差と捉えることも可能である。

出土遺物では、瓦の出土状況が時間的前後関係を示している可能性がある。窯3からは全く瓦が出土していないのに対し、窯1・2では瓦が出土している。窯1は古段階・新段階それぞれの側壁に僅かな量の瓦が礫とともに積まれており、埋土からもそれほど多くは出土していない。窯2では古段階の大型側壁礫の裏込めに多くの瓦が用いられており、窯2構築時にはすでに多くの瓦が存在していたことが確実である。また、窯2古段階・新段階の側壁材にも瓦が多用されており、埋土からも多くの瓦が出土している。こうした状況を瓦焼成にかかわる窯操業の時間差として整理すると、瓦を焼成していない窯3が最も古く、続いて構築された窯1古段階で瓦の焼成が開始され(既に報告したように、古段階側壁材の瓦は操業中の補修に伴う可能性が考えられる)、続く窯2でも瓦の焼成が継続して大量の瓦が生産されたと推定するのが、もっともありえそうな流れといえよう。以上の点から窯の構築は、窯3、窯1、窯2の順に行われたと考えられる¹⁾。

こうした所見を踏まえて、あらためて窯跡出土須恵器を見ると、窯3出土杯類と窯1・2出土杯類の間に僅かながら形態差を確認できるため、それらを時間差として認識可能かもしれない(第271図)²⁾。窯3第3段階出土の高台杯・杯の多くは、窯1・2出土のものに比べて口径に対する底径の比率がやや大きく、体部の立ち上がりが立ち気味となっている。口径に対する底径比率の縮小化は、丹羽野編年のA期からB期への変化としても認識されているので、大きな型式学的な変化との齟齬はない



第271図 窯の構築順序と杯皿類の形態

だろう。しかし、窯3第3段階の高台杯や杯の中にも、底径が狭く体部が開く形態のものが含まれており、窯3第3段階と窯1・2の形態差は相対的な関係に過ぎないともいえる。また、遺物出土数が少ないため量的関係は確実ではないものの、窯3第1段階の杯には、第3段階に多い形態よりも窯1・2に近い形態の方が多く見られる。こうしたことから、ここで確認した形態差は型式変化を示しているというよりはむしろ、窯の操業段階ごとに焼成品の形態的なまとまりが微妙に変化したことを示しているだけと捉えられる。

ただし、先述のように窯の構築・操業に時間差が存在したと考えられるため、こうした相対的な形態差が型式学的変化の一過程を示している可能性はあろう。しかしながら、こうした形態の微妙な違いはあくまで窯跡出土資料を比較して導かれた種差性であって、型式差として認識できるレベルにはない。おそらく、これらの資料が消費地から出土した場合には、時期差としての認識はできないだろう。いずれにしても、窯跡ごとに形態のまとまりが存在し、それらが製作の時間的なまとまりを反映していることは間違いない。その時間的な前後関係は、須恵器自体の内在的な要素では決定できず、外在的要素によって推定できるに過ぎない。

(2) 須恵器の製作技術(表96、写真4・5)

須恵器窯関連遺構群出土の須恵器は製作技術に共通した特徴を備えていると思われる。ここでは、主だった器種の製作技術の特徴について検討してみたい。

まず、基本的な技術的特徴を確認しておきたい。胎土と焼成に関しては、すべての器種が共通している。胎土にはよく水簸された精製粘土を用いており、礫や砂粒はほとんど観察できない。ただし、大甕には若干の礫や砂粒を加えている。焼成は全般に低温で行われていたと考えられ、二次焼成を受けた可能性がないものについてはほぼすべての須恵器が軟質で灰白色から褐色を呈している。

成形・整形にはロクロが多用されており、この時期の一般的特徴を示すといえる(北野2001a・b)。ケズリの方向や水挽きやロクロナデの痕跡から、ロクロ回転は時計回り方向と判断した。小・中型器種には水挽き成形が用いられており、なかでも小型器種では粘土紐接合痕を観察できるものが全くないため、粘土塊水挽き成形が行われていた可能性もある。ただし、平安時代における粘土塊挽き成形の存在については、肯定する説(田中1964など)と否定する説(田辺1981など)の対立が現在でも決着しておらず、本遺跡資料でその存在を確証することは難しい³⁾。いずれにしても、これらは水挽き成形を基本とする点ではすべての器種が共通する。ただし、細かく見ると、杯・皿のように水挽き成形で最終整形までが一体的に行われる器種がある一方、水挽き成形とは別に調整が加えられる器種も見られることが分かる。後者の調整も、基本的にはロクロ回転を利用したナデやケズリによって行われる。

また、小型器種と一部の中型器種には、底部切り離しに回転糸切りが用いられている。回転糸切りは小川貴司氏の実験研究では3種に大別されており(小川1979)、本遺跡のものは観察結果と後述する実験結果から、すべて「左離し糸切り」に分類できるものと判断した。

続いて、個別の器種の製作技術の特徴について概観してみたい(表96)。

表96に示した主な器種のなかでは、杯・皿と鉢は先述のように水挽きのみで成形や整形が行われる。それ以外の器種は複数の工程を踏まえている。高台のある器種は本体成形後、天地を逆にして高台を貼り付け、その状態で最終調整を施したことが、ケズリやロクロナデ方向の観察から分かる。

長頸壺は、粘土接合痕が明瞭に観察できることから、紐積み水挽きによって成形されたことが分かる。壺底部には粗雑なナデが見られ、切り離し手法が糸切りによっていない可能性が高い。また、そ

表96 小・中型品の製作手法

器種	突帯付高台杯		高台杯		杯	皿	長頸壺		壺類(高台底)		鉢	蓋
工程段階	1 器本体	2 高台	1 器本体	2 高台	1	1	1 胴部	2 口頸部	1 胴部下半	2 高台	1	1
成形手法	水挽き	貼り付け	水挽き	貼り付け	水挽き	水挽き	紐水挽き	紐水挽き	紐水挽き	貼り付け	水挽き	水挽き
設置方向	正位	逆位	正位	逆位	正位	正位	正位	正位	正位	逆位	逆位	逆位
調整手法	成形と一連	ケズリナデ	成形と一連	ナデ	成形と一連	成形と一連	ケズリナデ	ナデ	ナデ	ケズリナデ内ケズリ	成形と一連	ケズリナデ
設置方向		逆位		逆位			正位	正位	正位	逆位		正位
切り離し手法	糸切り	-	糸切り	-	糸切り	糸切り	-	ヘラ? →ナデ	糸切り	-	-	成形後糸切り

- ・「設置方向」はロクロへの器の置き方を示す。正位・逆位は使用時での向き(実測図の向き)に対する方向。
- ・成形の「水挽き」は粘土塊水挽き成形の可能性も考えられるもの、「紐水挽き」は紐積み水挽き成形と判断できるものである。ただし、前者は接合痕が見られないことを根拠としているだけであり、なお検討を要する。
- ・調整の「ナデ」は内外面のロクロナデ、「ケズリ」は外面のロクロケズリ、「内ケズリ」は内面の非回転ケズリ、「糸切り」は回転糸切りを示す。
- ・壺類(高台底)の工程3以降は不明である。

の破面には、他の器種には見られない明瞭な縞模様がすべての個体で観察できる。その構造は細かな層がミルフィーユ状に重畳したもので、粘土の積み方を示している可能性がある(写真4)。これに類似する縞状構造は、本遺跡出土の瓦の断面にも現れていることから、底部が板作りであった可能性も考えられる。胴部と頸部の接合は「2段構成」(田中1964)の範疇に含まれるもので、すべて肩部の上に頸部を積む方法で行われている。その接合部分は口縁側から手を入れてナデ付けられており、なかには頸部の内側に余っていた胴部の粘土がこのナデによって肩部内面へと巻き込まれたものも見られる(写真5)。また、ほとんどの個体で頸部の中ほどに接合痕を観察できる。こうした観察結果から、長頸壺は次の手順で成形されたと推測した。まず、底部を作り、その上に紐積み水挽き成形によって胴部を作る。体部肩部の上に1段の紐積みを施して頸部下半を水挽き成形し、胴部と頸部の接合部分の内外面をナデ付けて密着させる。その後、頸部下半部の上に紐積みを施し、水挽きによって頸部上半と口縁部を成形する。これに類した手法は、柳浦俊一氏によって「粘土紐積み上げ法」と仮称されており、出雲の長頸壺に通有の成形手法とされている(柳浦2001)⁴⁾。



写真4 壺底部破面の縞状構造

長頸壺類のなかでも、水瓶は一般的な長頸壺とは異なった作り方が採られているようである。水瓶の可能性のある小振りな長頸壺形の胴部では、断面に粘土接合痕が観察できないほか、底面には回転糸切り痕が残されている。また、一般的な長頸壺の底部断面に見られる縞構造も観察できない。また、口縁から頸部にも接合痕が観察できないほか、頸部下端には回転糸切り痕が見られる。



写真5 長頸壺頸部の接合痕

こうした点から、胴部と口縁から頸部は完全な別作りであったことが分かる。しかも、それぞれが粘土塊水挽き成形によるものとも考えることができよう。また、小壺も粘土接合痕が観察できないほか、底面に回転糸切り痕が見られることから、粘土塊水挽き成形による可能性もありえる。

こうした、ロクロ水挽き成形を基調とした小・中型器種と明らかに異なった成形技術をとるのが甕と瓶類である。いずれも断面や内面に粘土紐接合痕が観察でき、外面には平行タタキ痕、内面には同心円当て具痕が観察できる。したがって、甕と瓶類は紐積みタタキ成形によって製作されたことが分かる。

以上に確認した基本的な製作技術と器種毎の成形手法は、細部を除いて遺構間で差異はなく、遺跡内資料すべてに共通する。したがって、須恵器生産に携わった工人集団は共通の技術基盤を有しているものと評価できよう。

2 生産内容の復元

(1) 生産器種の構成(表97)

すでに示したように、遺跡内出土の須恵器・瓦は全て器種分類を行い、その数量をカウントしている。これは須恵器窯生産品の器種構成と生産量を推定することを目的としていた。そこで、この遺構別の器種組成をもとに窯毎の生産品目の推定を行っておきたい。

窯1からは、杯類を中心に、皿、壺類、甕、平瓦が一定量出土している。ただし、すでに報告した通り、床面直上出土遺物を中心として、窯内出土遺物には焼台として転用されたものが多く含まれている。とくに甕の破片はほとんどが転用焼台の可能性が高い。実際に甕の破片数は焼成品が遺棄されたと考えるには少ないほか、それらは複数個体に由来する可能性が高い。したがって、これらが窯1で焼成された可能性は低い。床面直上出土の小型品も焼台として持ち込まれた可能性があるが、出土数がかかなり多いことや二次焼成を受けていないものも多く含まれているため、残置された焼成品を一定量含むと考えられる。

段階別に見ると、窯1古段階では杯類と皿は量的にまとまるのに対し、その他の器種は出土破片数が少ない。出土量がまとまる高台杯、杯、皿の3器種は、出土破片数とその残存率からみて、この窯で焼成された可能性が高く、杯がその量的主体であったと考えられる。そのほかの器種は積極的に焼成品とは位置づけられないが、先述のように、出土状況からみて、窯1古段階で瓦が焼成され始めた可能性が高い。

窯1新段階でも高台杯、杯、皿が焼成された可能性が高く、やはり杯がその主体であったと考えられる。新段階では突帯付高台杯も焼成されていた可能性が高い。また、新段階では、長頸壺を主とした壺類の破片が大量に出土している。これらには焼台として持ち込まれたものが多く含まれていると考えられるものの、破片数の多さと二次焼成を受けていない破片が多いことから、窯1新段階で焼成された長頸壺片が含まれている可能性が考えられる。その他に、瓦も一定量出土しており、この段階でも焼成されていた可能性が高い。

窯2古段階の出土遺物は、先述のとおり残置された焼成品が主体となっているため、焼成品を推定する上での条件に恵まれている。高台杯や杯、皿はほぼ確実に焼成されており、杯が主体となっている。また、壺類、甕、瓦もまとまった量の出土が見られる。壺類は焼台として持ち込まれたことが確実な長頸壺(第5章第100図:220)を含んでいるものの、それ以外にもまとまった数が出土しているの

で、窯2古段階で長頸壺などが焼成されていた可能性があろう。甕は少なくとも3個体(第100・101図：219・223・224)が焼成されている。これらはいずれも小型の甕である。瓦はその多くが窯壁材や焼台であった可能性が高いものの、出土数の多さから見てこの窯で焼成していたと考えてもよいだろう。そのほか、1点のみながら完形の小壺が出土しており、これも窯2古段階で焼成されたと考えられる。

窯2新段階出土遺物は、床面直上遺物には焼台や窯壁材が多く含まれているほか、古段階焼成品に極めて類似した個体が見られることから、窯2新段階に先行する窯の焼成品が多く含まれると考えられる。したがって、特に出土量の多い杯類、皿、瓦は窯2新段階の焼成品をいくらかは含むと考えてよいだろうが、壺・甕については一定量出土しているものの積極的に焼成品と考えられない。

窯1・2は窯の規模が小さく、大甕を焼成することはほぼ不可能であるため、大甕はすべて規模の大きな窯3で焼成されたと考えている。実際に、窯3第3段階からは大量の甕が出土している。ただし、そのほとんどは第3段階床面に敷き詰められていた焼成の極めて悪い甕(第123図：299・300。両者は同一個体)とその同一個体片であるため、少なくとも第3段階の最終操業時に焼成されたものではない。ただし、1個体全量に近いほどの破片が出土しているため、第3段階操業過程で生じた焼成不良品をそのまま床面補修に使った可能性が考えられる。第3段階からは他に、最終操業に伴う可能性の高い高台杯と杯が出土している。また、長頸壺と鉢も、数は少ないながらも、二次焼成を受けていない残存率の大きい個体が出土しているので、第3段階で焼成された可能性がある。したがって、窯3第3段階では、高台杯、杯、甕、長頸壺、鉢が焼成されていた可能性がある。なお、窯3の第1段階・第2段階は出土遺物が非常に少なく、焼成品を推定できる状態にない。

また、5章で触れたとおり、排滓場2の須恵器は窯3で焼成されたものが主体となっている可能性が高い。後述するように、実際に窯3と排滓場2出土杯類は形態が非常に類似しており、その蓋然性はかなり高いと考えている。排滓場2からは杯類が多く出土しているほか、長頸壺を主とした壺類も相当量の出土が見られる。このことも、窯3で長頸壺が焼成されていた可能性が高いことの傍証となるだろう。

以上の推定は、あくまで窯内出土遺物のうち焼成品と考えられるものを列挙しただけで、これら以外の器種が生産されていた蓋然性は高いものの、生産品目の概要は把握できたと思う。これをまとめたのが表97である。窯1・2では小型品を主体に、中型品と瓦が従属的に生産されており、窯3では杯類を主体としながら、大型品と中型品があわせて生産されていたと推定できる。窯1・2と窯3では、大型品と瓦の有無で生産品目に大きな違いがあり、大型品に関しては窯構造とその規模に規定されていることが指摘できる。また、従属的ながらも瓦を生産する窯1・2はいわゆる瓦陶兼業窯と評価できるだろう。

こうした想定は、灰原出土の器種組成との間にも大きな齟齬はないと思われる。なお、窯内出土遺物から推定できなかった長頸壺以外の各種壺類、瓶類、鉄鉢、高台皿、蓋、硯などは、特定の灰原に偏在していないため、どの

表97 出土破片数から推定した窯ごとの生産品目

遺構名	小型器種			中型器種			大型器種	瓦	
	突帯付高台杯	高台杯	杯	皿	長頸壺	鉢	小型甕		甕
窯1古段階		○	◎	○				×	△
窯1新段階	○	○	◎	○	△			×	○
窯2古段階		○	◎	○	△		○	×	○
窯2新段階		○	◎	○				×	○
窯3第3段階		◎	◎		△	△		○	×

◎：多量生産された器種 ○：一定量生産された器種 △：少量生産された器種 ×：生産された可能性が極めて低い器種

*主に窯内に残された破片数をもとに推定しているため、空欄の器種に関しては少量生産されていた可能性が残る。

窯から排出されたものかを判断するのは難しい。しかしながら、こうした生産量が少ない器種が多く存在することは重要であろう。生産の量的主体となる限られた器種以外は多品目少量生産を行っており、器種個別に需要に応じて適宜生産されたと考えられる。

(2) 製作量の推定(表98)

以上のように、製作されていた器種の品目と製作器種量の相対的な多寡をつかむことができた。しかしながら、絶対的な製作量がどの程度であったか、また、実際の個体数での器種の組成比がどの程度であったかについては、これまで見てきたような破片数での器種組成では明らかにできない。そのため、次のような重量を用いた方法で遺跡内に残された須恵器の個体数の推定を試みた。

A：完形1個体あたりの重量を量り、遺構毎、器種毎に平均値を求めた。B：出土した破片の重量を遺構毎、器種(分類番号)毎に量った。ただし、作業量が膨大になるため全点の計量はせず、各遺構・器種(分類番号)とも破片100点を目安に計量し、破片1点当たりの重量平均を出した。この平均重量に各器種の遺跡出土破片数を乗じ、出土破片の全重量を推定した。なお、AとBでは遺構毎、大別層位毎に各器種の重量データを採った。遺構や層位毎に完形品や破片の重量が異なるのではないかと予測したためである。実際にはこうした傾向は見られず、遺構・層位に関わらず近似した数値が得られた。そのため、一応遺構別には記載しているが、層位については各遺構内で平均している。C：Bで求めた器種別の破片総重量を、Aで求めた完形個体の平均重量で除し、出土破片が完形何個分の重量に相当するかを計算した。これが計算上の推定個体数である。このうち、器種が確定できない分類番号⑥・⑧については、可能性のある器種1種のみで個体数を計算した数字と、可能性のあるすべての器種が、器種の確定できた個体数と同じ比率で含まれていると仮定して計算した数字を示した。後者の方法で比率配分した推定個体数の方が、実態に近いと考えている(表98)⁵⁾。

以上の方法によって求めた遺跡全体での須恵器の推定個体数は、高台杯約234点⁶⁾、杯約713点、皿約159点である。小型器種のみしか完形個体が存在しておらず、この方法で個体数が推定できたのはこれら3器種に過ぎなかった。ただ、これらの小型器種が本須恵器窯跡群での生産品の主体となっているので、生産量のイメージをある程度は得ることはできるだろう。

表98 須恵器の重量と推定個体数

A 完形個体の平均重量

	高台杯	杯	皿
全体	222.3	129.0	113.0
窯1	216.0	130.0	-
窯2	222.5	129.5	109.0
窯3	222.0	127.0	-
灰原1	-	129.0	121.0

単位はグラム

B 破片1点あたりの平均重量

	高台杯 ③	杯 ④	皿 ⑤	杯類 ⑥	皿類 ⑦	杯類or 皿類⑧
全体	26.2	11.9	14.9	6.4	6.8	2.4
窯1	16.7	12.4	14.7	6.5	6.7	2.1
窯2	21.2	13.3	16.3	7.1	7.1	2.9
窯3	30.3	11.6	-	6.6	-	2.1
灰原1	24.4	12.9	15.0	6.8	7.0	2.0
灰原2	23.8	11.7	17.0	5.4	6.9	2.4
灰原3	33.3	9.4	14.1	6.2	6.6	2.7

単位はグラム

C 遺跡内出土須恵器の推定個体数

推定に用いた分類番号*	高台杯	杯	皿
③～⑤・⑦での推定数	121.3	374.1	123.6
⑥での推定数(比率配分*)	59.4	178.2	-
⑥での推定数(高台杯のみ)	162.8	-	-
⑥での推定数(杯のみ)	-	280.6	-
⑧での推定数(比率配分*)	53.5	160.3	35.7
⑧での推定数(高台杯のみ)	164.8	-	-
⑧での推定数(杯のみ)	-	283.9	-
⑧での推定数(皿のみ)	-	-	324.1
推定総数(⑥・⑧は比率配分)	234.2	712.6	159.3
推定総数(最大数)	448.9	938.6	447.7

単位は「個」

*分類番号③は高台杯、④は杯、⑤・⑦は皿、⑥は杯類、⑧は杯類または皿類。詳細は第1章第3節参照。

*⑥の比率配分は③：④の個体数比1：3を適用

*⑧の比率配分は③：④：⑤⑦の個体数比3：9：2を適用

中・大型器種は同様の方法で個体数が推定できないが、参考までに上記の方法で使用した数値を壺類と甕についても示しておく。甕は有意な重量が得られる個体は存在しない。壺も完形個体は存在しないが、最も残りのよい残存率5分の2の長頸壺(第162図:589)で重量が1003グラムである。破片1個あたりの平均重量は、壺類(分類番号㊸)破片で23.5グラム(母数500点)、甕破片で70.2グラム(母数550点)である。仮にこのデータで壺の個体数を推定してみると、約21個体分の重量に相当する破片が遺跡内から出土していることになる。ただし、壺は複数器種・形式を含んでいるので、その正確性はかなり低いと思われる。なお、甕は遺跡から出土した破片の総重量は約250キログラムと推定できる。

瓦はすべての破片の重量も計測しているが、本遺跡の場合、個体ごとに重量が著しく異なっており、須恵器と同じ方法で個体数を求めるのは難しい。そこで、瓦の隅数から個体数を割り出してみると、平瓦126.5個体(隅数合計506)、丸瓦23個体(同92)、熨斗瓦約1個体(同3)、隅切瓦1個体分(同3)という数字が得られた(表38参照)。

さて、この方法で求めた数字は、遺跡内に残っていた個体の推定数である。当然のことながら遺跡に残っていた須恵器の数は生産された総量の一部に過ぎず、さらにはそれらも後世の地形改変などで数量を減じているはずである。後者の問題は保留するほかないため、失われた須恵器の破片数が大勢に影響ない程度であったと仮定して議論を進めたい⁷⁾。一方、前者の問題は非常に重要だが、窯での焼成に伴ってどれほどの割合で廃棄品が生じたか、これを明らかにすることは非常に困難である。一般論として参考になるデータは、文献史料、実験例、民俗・民族誌例などに求めることができよう。窯焼成品の廃棄率が調査された実験例や民俗・民族誌例は十分検索できなかったが、文献史料では木立雅朗氏によって紹介された近代の例があり、それによると「昭和30～40年代の京式登り窯(連房式登り窯)ですら、製品の3割以上が捨てられた」という(木立2010)。古代の須恵器窯の廃棄率とどの程度の差があるのか全く不明ながら、参考にこの廃棄率3割という数字から生産された総個体数を推測すると、高台杯約700個、杯約2100個、皿約600個となる。瓦も一応同じ廃棄率を当てはめると、生産総数は平瓦約400枚、丸瓦約80枚と推定できる。

こうして得られた数字が同時代の窯として多いのか少ないのか、比較する材料をもたないため不明とせざるを得ない。ただ、単純にこの数字を見ただけでも、莫大な量が生産されていたわけではないことは想像がつく。窯3基の継続時期幅を考えると、この総生産量は、小規模な生産がある程度累積した結果として捉えられるだろう。

(3) 法量分析から見た製作単位(第272・273図、表99・100)

窯での須恵器生産の実態を解明する上で、工人組織の実態把握は極めて重要だろう。ここでは、須恵器の形態的、技術的特徴を手がかりに、主に工人集団の規模を推定してみたい。一般的に、工人集団の規模が大きい(工人の数が多)いと、製作された須恵器の形態的、技術的特徴にばらつきが大きくなると想定できよう。もちろん、この想定は一つの仮説に過ぎないが、少なくともばらつきが非常に大きい場合よりも、小さい場合の方が製作の単位にまとまりがあるといえそうである。

こうした予測のもと、形態的特徴のまとまり具合や遺構間での形態差の程度を検討するために、須恵器の法量分析を行った。分析は、すべての窯で生産の主体となっている杯皿類を対象に、実測個体のうち全形が分かるもの(図上復元個体含む)を用いて行った。分析に用いた計測値は口径・底径・器高の3つで、これを遺構毎に統計処理し、あわせて散布図を作成した(第272・273図、表99・100)。

統計値は、平均値、中央値(メジアン)、標準偏差のほか、母数が大きいものでは最頻値(モード)を

遺構ごとに示した。母数が極端に少なくなければ、平均値よりも中央値の方が有意な値と考えられるが、実際には中央値から極端に外れた計測値となる個体はほとんど存在せず、両者はほぼ同じ値となっている。

法量計測値の平均値・中央値を見てみると、窯ごとにいくらか異なっていることが分かる。最も分析個体数の多い杯の値を見てみると、先述の通り、窯3第3段階の底径の大きさが再確認できる。杯の底径の値は他の窯間でも多少の差が見られる。杯の口径の値は窯間ではほとんど変わらないが、器高の値は窯2が僅かに大きい。高台杯でも、窯3第3段階での底径の大きさが確認できる。皿でも窯

表99 杯皿類の法量統計値

A 杯の法量統計値

遺構	統計種別	口径	底径	器高
窯1古段階 n=16	平均値	12.29	6.74	3.92
	中央値	12.35	6.75	3.90
	標準偏差	0.73	0.63	0.32
窯1新段階 n=11	平均値	12.52	6.92	4.04
	中央値	12.30	7.00	4.15
	標準偏差	0.95	0.54	0.59
窯1全体 n=30	平均値	12.43	6.83	3.95
	中央値	12.35	6.85	3.95
	最頻値	12.30	7.00	3.80
	標準偏差	0.82	0.58	0.44
窯2古段階 n=30	平均値	12.59	6.82	4.20
	中央値	12.55	6.85	4.15
	標準偏差	0.51	0.40	0.30
窯2新段階 n=3	平均値	12.63	7.00	4.33
	中央値	12.30	7.00	4.30
	標準偏差	0.54	0.16	0.05
窯2全体 n=37	平均値	12.58	6.86	4.19
	中央値	12.50	6.90	4.20
	最頻値	12.40	7.00	4.10
	標準偏差	0.48	0.38	0.30
窯3第1段階 n=3	平均値	12.70	7.40	4.03
	中央値	12.60	7.20	4.00
	標準偏差	0.37	0.43	0.21
窯3第3段階 n=7	平均値	12.21	7.56	3.87
	中央値	12.10	7.80	3.95
	標準偏差	0.62	0.57	0.34
窯3全体 n=14	平均値	12.33	7.25	3.94
	中央値	12.25	7.05	3.98
	最頻値	12.00	7.00	3.80
	標準偏差	0.53	0.65	0.33
灰原1 n=32	平均値	12.17	6.67	3.78
	中央値	12.20	6.60	3.85
	最頻値	13.00	7.00	3.90
	標準偏差	0.75	0.52	0.33
灰原3 n=9	平均値	12.32	6.81	4.02
	中央値	12.40	6.80	4.00
	最頻値	12.70	7.00	4.00
	標準偏差	0.42	0.28	0.27
灰原全体 n=45	平均値	12.19	6.68	3.83
	中央値	12.20	6.60	3.90
	最頻値	13.00	7.00	3.90
	標準偏差	0.71	0.47	0.32
全体 n=138	平均値	12.32	6.82	3.98
	中央値	12.40	6.80	4.00
	最頻値	12.00	7.00	4.00
	標準偏差	0.70	0.56	0.37

B 高台杯の法量統計値

遺構	統計種別	口径	底径	器高
窯2全体 n=4	平均値	14.65	6.90	5.91
	中央値	14.70	6.90	5.90
	標準偏差	0.30	0.22	0.29
窯3第3段階 n=4	平均値	13.18	7.45	5.94
	中央値	13.00	7.40	5.68
	標準偏差	0.63	0.30	0.76
灰原全体 n=4	平均値	15.18	7.38	6.30
	中央値	15.10	7.45	6.30
	標準偏差	0.40	0.53	0.07
全体 n=18	平均値	14.38	7.16	6.16
	中央値	14.65	7.20	6.18
	最頻値	15.0	7.0	5.8
	標準偏差	0.93	0.53	0.61

C 皿の法量統計値

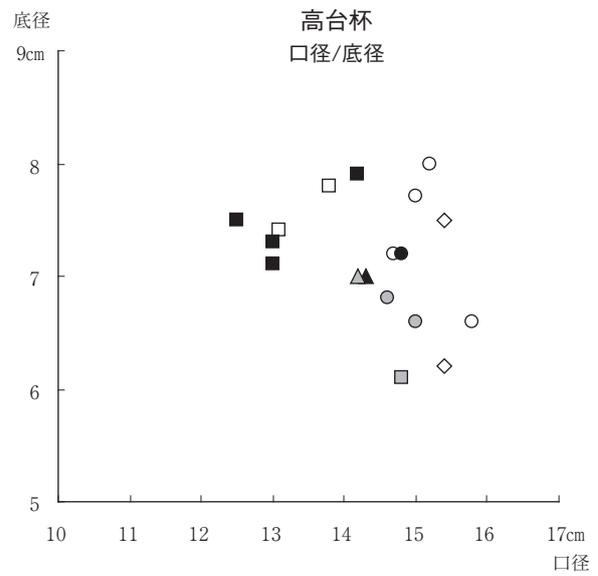
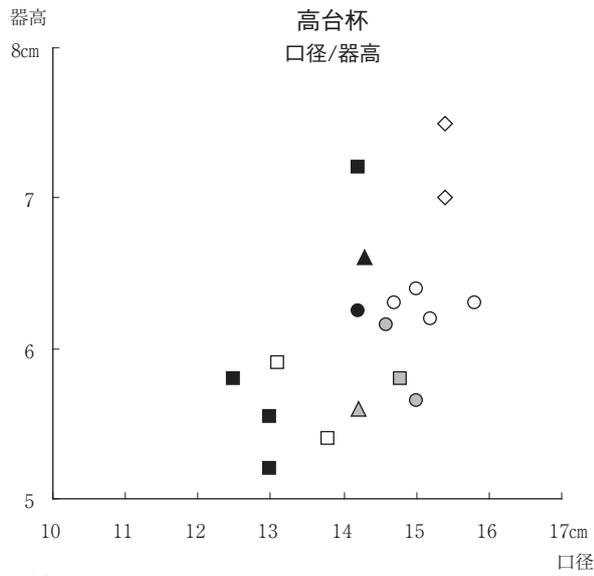
遺構	統計種別	口径	底径	器高
窯1古段階 n=6	平均値	13.17	6.65	2.41
	中央値	12.85	6.70	2.43
	標準偏差	0.60	0.42	0.10
窯1新段階 n=7	平均値	14.09	7.47	2.34
	中央値	14.30	7.40	2.30
	標準偏差	0.93	0.70	0.24
窯1全体 n=16	平均値	13.81	7.19	2.38
	中央値	13.95	7.10	2.43
	標準偏差	1.10	0.70	0.21
窯2古段階 n=6	平均値	13.05	6.15	2.97
	中央値	13.15	6.30	3.10
	標準偏差	0.43	0.52	0.50
窯2新段階 n=3	平均値	13.93	6.87	2.77
	中央値	14.00	7.00	2.90
	標準偏差	0.74	0.26	0.26
窯2全体 n=11	平均値	13.18	6.35	2.86
	中央値	13.00	6.60	3.00
	標準偏差	0.74	0.62	0.43
灰原1 n=16	平均値	12.93	6.69	2.45
	中央値	12.90	6.50	2.50
	標準偏差	1.00	0.66	0.34
灰原3 n=5	平均値	13.40	7.10	2.54
	中央値	13.20	7.20	2.50
	標準偏差	0.28	0.13	0.16
灰原全体 n=23	平均値	13.10	6.81	2.44
	中央値	13.20	7.00	2.50
	標準偏差	0.89	0.58	0.31
全体 n=53	平均値	13.38	6.83	2.52
	中央値	13.20	7.00	2.50
	最頻値	14.0	7.0	2.5
	標準偏差	0.97	0.70	0.36

間での微妙な違いが見られ、窯1新段階で底径の値が大きい点と、窯2で器高の値が大きい点の確認できる⁸⁾。

また、法量計測値のばらつきを見るために算出した標準偏差を見てみると、遺構毎に差があることが分かる。当然ながら、遺跡全体で見た場合は偏差がある程度見られる。一方、窯内出土の杯皿類の偏差は全般に小さいものの、詳細に見ると窯毎に差がある。窯2・3はその値がかなり小さいのに対し、窯1の値は大きく、遺跡全体での偏差とほぼ同じばらつきの程度を示している。また、灰原1はばら

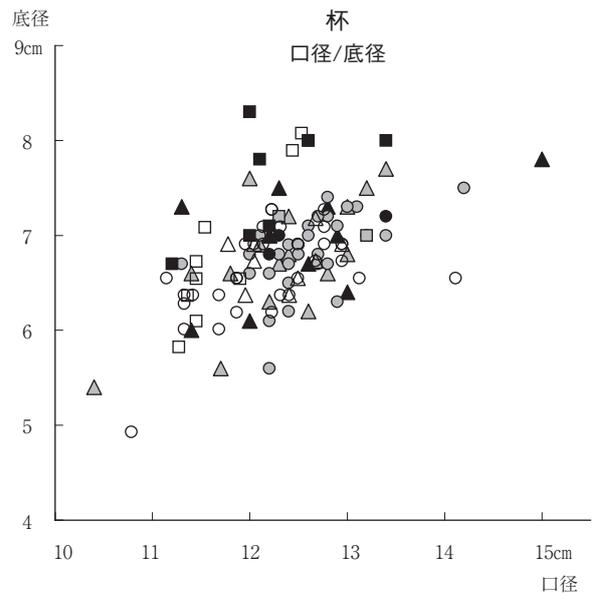
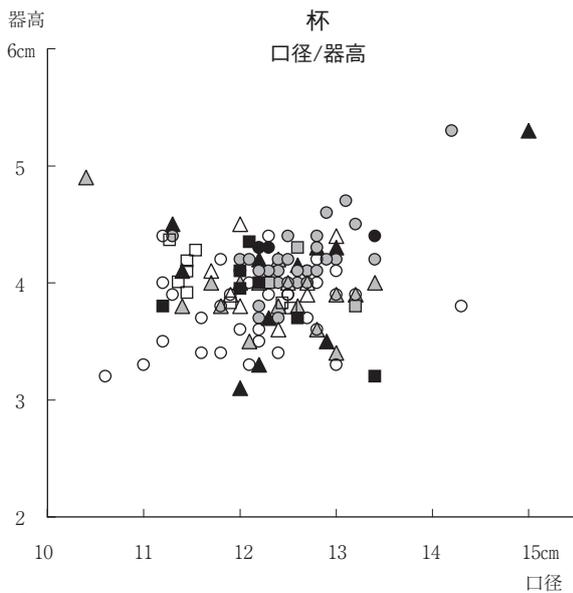
表100 杯法量の計測値比率

遺構	口径：底径：器高	口径：器高
窯1古段階	3.17：1.73：1	1.83：1
窯1新段階	2.96：1.69：1	1.76：1
窯1全体	3.13：1.73：1	1.8：1
窯2古段階	3.02：1.73：1	1.83：1
窯2新段階	2.86：1.63：1	1.76：1
窯2全体	2.98：1.64：1	1.81：1
窯3第3段階	3.06：1.97：1	1.55：1
窯3全体	3.08：1.77：1	1.74：1
灰原	3.13：1.69：1	1.85：1
全体	3.1：1.7：1	1.82：1



凡例

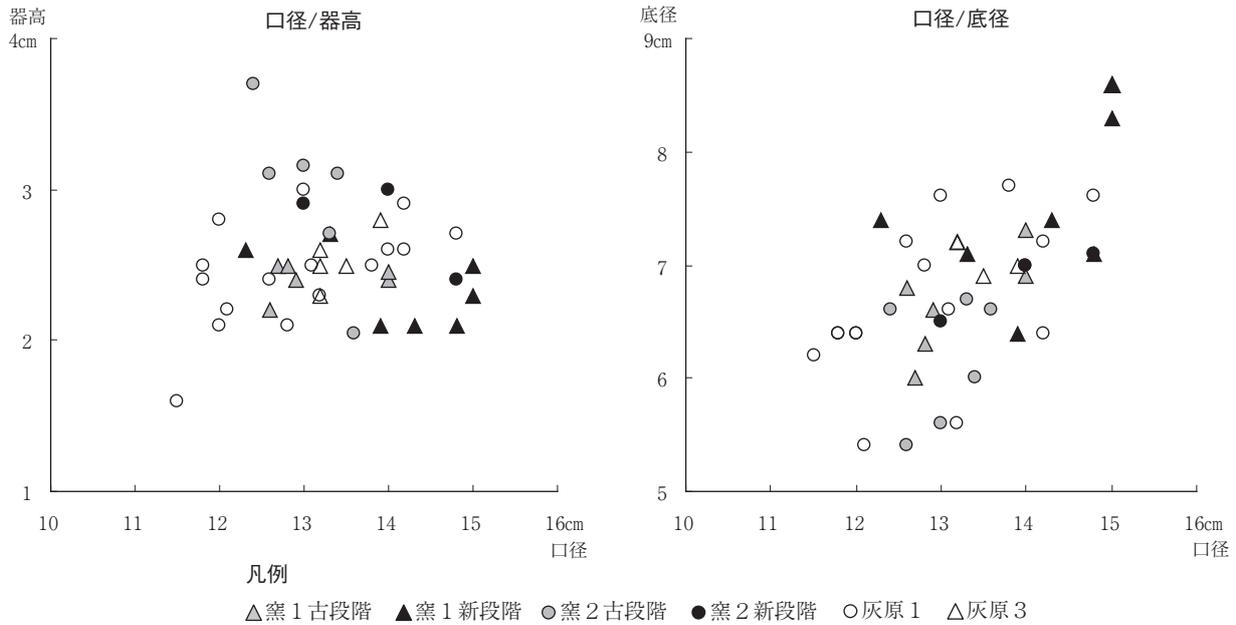
▲ 窯1埋め戻し ○ 窯2古段階 ● 窯2新段階 ▲ 窯1埋め戻し ■ 窯3第3段階 □ 窯3上層 ○ 灰原 ◇ 道 □ 排滓場2



凡例

▲ 窯1古段階 ▲ 窯1新段階 ○ 窯2古段階 ● 窯2新段階 □ 窯3第1段階 ■ 窯3第3段階 ○ 灰原1 △ 灰原3 □ 排滓場2

第272図 杯類の法量分布



第273図 皿の法量分布

つきが大きいものの、灰原3はばらつきが小さいことも確認できる⁹⁾。

統計値から推測できた形態の違いや遺構毎での形態のまとまり具合を、視覚的に確認するために散布図を示した(第272・273図)。

高台杯の散布図からは、全般に母数が少ないものの、窯3第3段階と窯2古段階出土のものがそれぞれ良くまとまることが確認できる。なお、排滓場2出土資料が窯3第3段階と近い法量であることも確認でき、先述のように排滓場2には窯3から排出された須恵器が多く含まれているという推測を裏付けている。

杯の散布図からは、窯2古段階出土資料が非常に良くまとまった分布を示すことが確認できる。また、窯3第3段階出土のものは、他と比較して口径が狭く、底径が広いことが確認できるほか、窯2ほどではないものの法量もまとまっていることが分かる。窯1は古段階・新段階出土資料とも法量にややばらつきがあり、灰原1出土資料とほぼ同じ範囲に分布している。なお、杯も排滓場2出土のものが、窯3第3段階と近い分布を示している。

皿の散布図では、窯1古段階と窯2古段階出土資料がある程度まとまっている。ただし、全般に口径・底径の計測値のばらつきが大きく、杯ほどのまとまりの良さは見られない。

このように、窯毎に法量が若干異なっていることが確認できた。また、一括性が高い出土状況を示す遺構では、法量のまとまりが非常に良いことも確認できた。こうした窯間での形態的特徴の違いと、窯内での形態の近似性は、須恵器の製作単位のまとまりを表している可能性が高いと考えられる。製作の単位はもちろん時間差でもあるが、それが時間的前後関係に従って形態変化しているというよりは、製作の機会毎に形態にまとまりがあったと捉えた方がよいだろう。先に確認した窯3第3段階の場合は、その差が大きかったため、時間差に還元しうる形態差として認識できたものといえる。

(4) 窯2古段階の工人数の推定(第274・275図)

さて、このように製作単位によって形態がまとまると考えた場合、1回の製作に関わった工人は、形態に差があまり出ない程度の少人数であった可能性が考えられる。この点を、焼成品としての一括性が最も高い、窯2古段階出土資料を用いて確認してみたい。

第6章 総括

窯2古段階出土須恵器のなかでは杯の個体数が最もまとまっている。したがって、杯の細部の調整に見られる技術的特徴を手がかりに、工人数を推定してみたい。

杯は、第5章でも触れた通り、やや大型の形式のものを除いて、口縁の細部調整と底部の糸切り痕から、a～c類の3つのグループに分類可能である(第274図)。

a類は、口縁端部の内面に強いナデを施して明瞭な凹みを作り出している。また、底部の回転糸切り痕の回転の中心が、端からやや中央に寄った位置に見られる。この類型に分類できるものは11個体確認できる(第99図：178～188)。

杯の細部に見られる技術的特徴

a類 口縁端部内面を強くナデて凹みをつける。糸切り回転の中心が中央に寄る。



a類(179)の口縁と底部

b類 口縁端部を細く仕上げる。糸切り回転の中心が端に寄る。



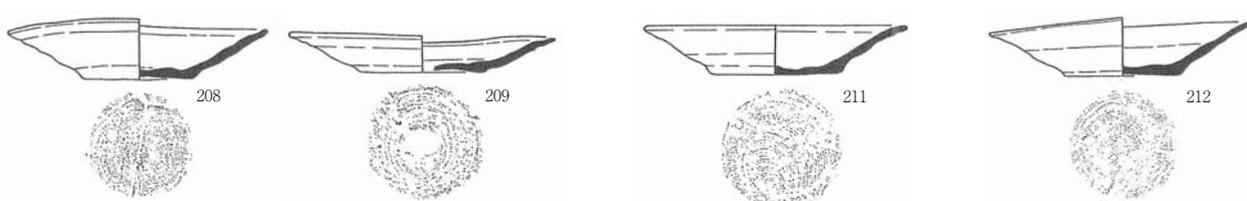
b類(191)の口縁と底部

c類 口縁端部を厚めに収める。糸切り回転の中心が中央に寄る。



c類(199)の口縁と底部

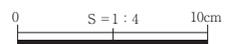
皿の細部に見られる技術的特徴



口縁端部内面に凹み。糸切り回転中心中央寄り。
杯 a類に類似した特徴。

口縁端部薄く仕上げで外反。
糸切り回転中心端寄り。

口縁薄くそのまま収める。
糸切り回転中心中央寄り。



第274図 窯2古段階出土杯・皿の技術的特徴

b類は、口縁端部を細く尖り気味に仕上げており、糸切り痕の回転の中心は端にあるものが多い。なお、一部に糸切りの中心が中央寄りになるものを含んでおり(第99図：192・195・197)、これらはむしろ次のc類に分類すべきかもしれない。ここでは、口縁の形態を優先してb類としておく。この類型は9個体見られる(第99図：189～197)。

c類は、口縁端部を厚めに収めており、糸切り痕の回転の中心が中央に寄っている。この類型は6個体見られる¹⁰⁾。

底部糸切りの回転の中心位置に違いが生じる原因を製作実験によって検討したところ、糸(撚り紐)の底部への差し込み方の違いによることが分かった¹¹⁾。ロクロを回転させながら、糸を底部の端に軽くあてて、底部に糸を巻きつけてから引き切れば、糸切りの回転の中心が底部端部に生じる。一方、ロクロ回転する底部に糸を少し差し込んでから、糸を巻きつけて引き切れば、糸切り回転の中心が糸を差し込んだ位置に生じる(写真6・7)。この糸切りの動作の違いは、ごく僅かなもので、工人集団の技術系譜の違いのような大きなレベルによるものではなく、工人のクセによるものである可能性が高い。同様に、口縁の仕上げの違いも工人のクセによるものと判断できよう。こうしたクセが、工人個人(1人)と直接対応すると仮定すれば、杯製作に関わった工人は3人程度であったと推定できる。

杯に見られる細部の技術的な特徴は皿にも確認できる。皿は全形が分かる資料が5個体しかいないため、杯と同様の分類はできていないが、形態的特徴は概ね3つのグループに分けられそうである。

208・209は杯a類と同様の特徴をもっており、口縁端部内面にナデによる凹みが観察できるほか、糸切りの回転の中心が中央寄りにある。このように、複数器種にまたがって共通した特徴が存在するため、それが工人個人に結びつく可能性は十分に考えられそうである。211は口縁をわずかに外反させており、糸切りの回転の中心が端にある。210・212は口縁をそのまま薄く収めており、糸切りの回転の中心が中央に寄っている。208・209とa類杯の関係ほどの確からしさはないものの、211はb類杯に、210・212はc類杯に対応する可能性も考えられよう。このように、皿の技術的特徴を見ても、杯で想定した工人の規模と整合した状況が窺える。

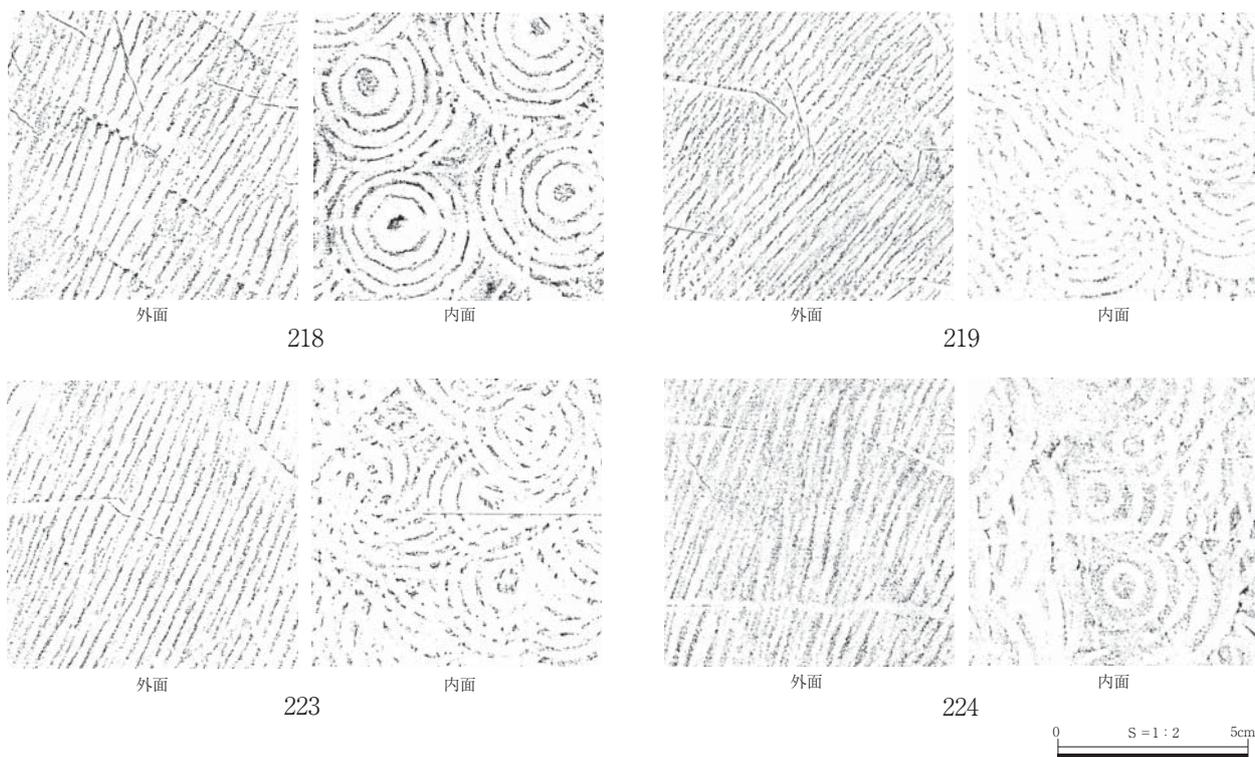
また、窯2古段階からは、この段階の焼成品の可能性が高い小型甕が4個体出土している。これらの甕のタタキや当て具痕を比較すると、218・219・223は同一のタタキ具や当て具による可能性が高く、224はそれらとは別のものによる可能性が高い。したがって、遺構内に残された甕をみる限りでは、タタキ具や当て具は2セット存在していたと考えられる(第275図)。これらの工具が工人個人と結び



写真6 a類糸切り痕の実験復元例



写真7 b類糸切り痕の実験復元例



第275図 窯2古段階出土甕の拓影

つくとの前提に立てば、甕製作に関わった工人は2人程度だった可能性が考えられる。もちろん、窯外に持ち出された焼成品に他の工具で調整された甕が存在する可能性も考えられるが、出土した4個体中3個体までが同一工具の可能性が高いため、確率論的にさほど多くの工具が存在したとは考えにくいだろう。

以上のように、窯2古段階出土須恵器からは、この段階の須恵器製作に関わった工人は3人程度の少人数だったことが推定できる。おそらく、この推定は、他の窯段階の工人数にも敷衍しても大過ないと考えられるため、本窯跡群での須恵器生産は小規模な工人集団によって行われていたと想定できよう。

3 須恵器消費地の推定

(1) 形態的特徴による消費地の推定

本遺跡の窯跡群で生産された須恵器の供給先を検討することは、須恵器の流通形態を解明する上で重要であるだけでなく、窯の経営主体を考える上で、ひいては本遺跡の生産遺跡としての特質を明らかにする上で非常に重要である。経営主体の問題については第6章第6節で検討するので、ここではその前提となる本須恵器窯跡群生産品の供給先推定を目的に、消費地遺跡出土資料を検討してみたい。

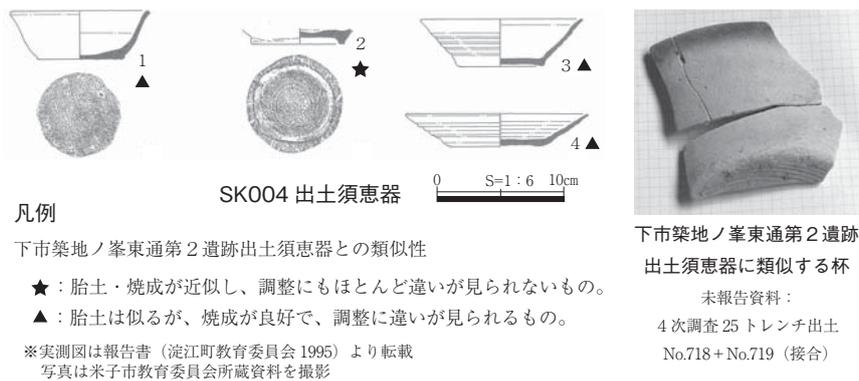
須恵器窯関連遺構群からは、供給先を推定する上で鍵となる特徴的な器種がいくらか出土している。詳細は第6章第3節で検討するが、最も特徴的なのは瓦の存在である。瓦の供給先は、官衙関連や寺院関連の遺跡に絞られるだろう。さらには、隅切丸や瓦製相輪とみられる資料が含まれていることから、官衙関連遺跡よりも寺院に供給していた可能性が濃厚である。寺院への供給の可能性を踏まえて出土資料をみると、寺院に関連が深そうな器種がいくつか確認できる。水瓶(390・391など)や小壺(214)などの壺類や比較的多く出土した鉢類は仏具の可能性が考えられるほか、風字硯(408・409・

500・615・616)も寺院に供給された可能性もあろう。

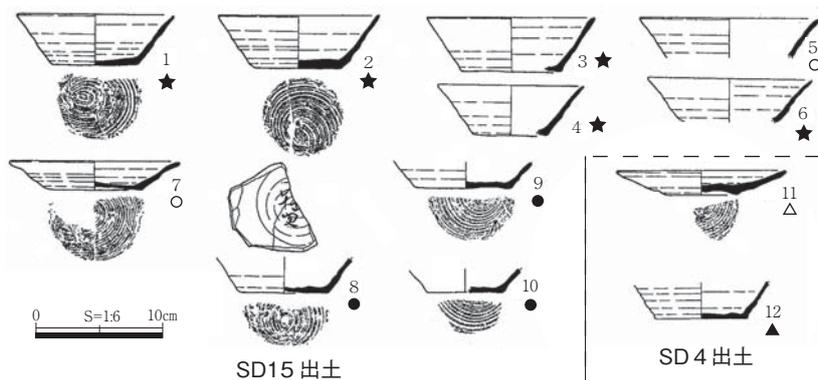
さて、本遺跡と同じ古代汗入郡内に所在する古代寺院は今のところ上淀廃寺のみである(淀江町教育委員会1995)。そこで、上淀廃寺から出土した同時期の須恵器を検討してみたい。上淀廃寺で平安時代須恵器が最もまとまって出土している遺構はSK004である(第276図)。この遺構から出土した須恵器のほとんどは、焼成が良好で、外面にロクロ目が強くつく下市築地ノ峯東通第2遺跡では見られない調整の特徴をもっており、本窯跡群の製品ではない可能性が高い。ただし、破片のため形態が不明ながら、胎土や焼成に限ってみれば本遺跡の須恵器と類似した高台杯も存在する(第276図：2)。また、未報告資料のなかには、胎土や焼成に加えて形態も本遺跡出土のものと類似した杯も複数確認できた(第276図：写真)。したがって、これらの情報だけでは確定できないものの、本窯跡群の製品が平安時代の上淀廃寺に供給されていた可能性を考えてもよさそうである。

上淀廃寺以外にも、本遺跡周辺に存在する平安時代遺跡出土の須恵器も検討してみよう。汗入郡内に所在する他の平安時代遺跡には、茶畑六反田遺跡((財)鳥取県教育文化財団2002・2004)と名和衣装谷遺跡((財)鳥取県教育文化財団2003)がある。

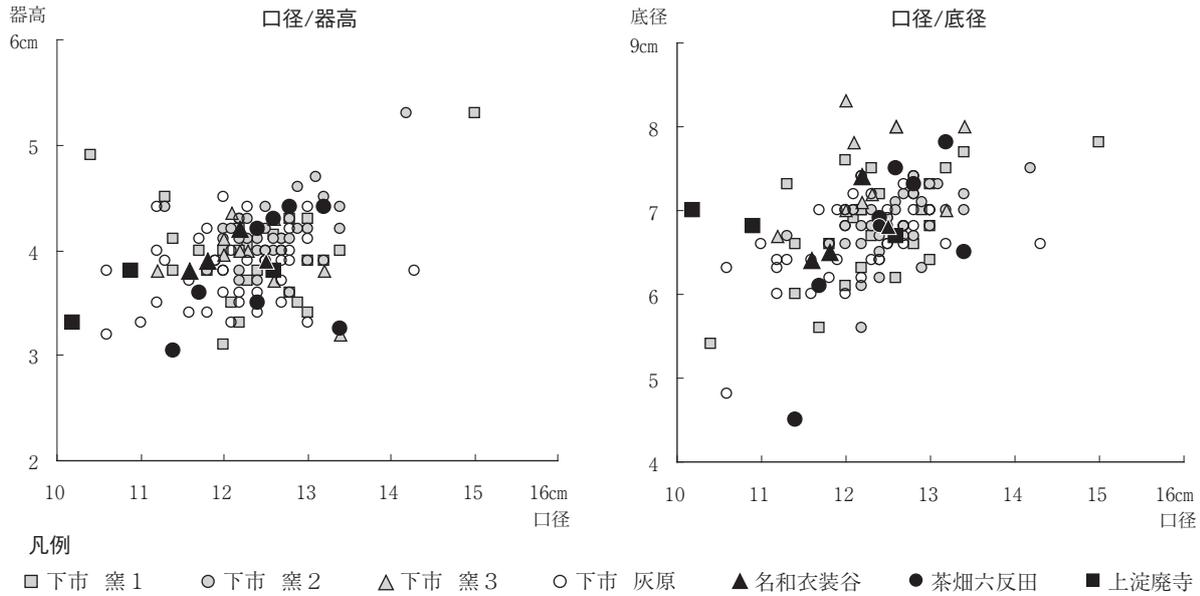
茶畑六反田遺跡では、複数の遺構からまとまった量の平安時代須恵器が出土している。とくに、SD15からは時期差がほとんどない良好な一括資料が得られている。このなかには、胎土、焼成、調



第276図 上淀廃寺出土の平安時代須恵器



第277図 茶畑六反田遺跡の平安時代須恵器



第278図 汗入郡内出土杯の法量比較

整の各要素とも、下市築地ノ峯東通第2遺跡出土資料に類似したものが多く含まれている。その一方で、胎土が粗く、焼成が良好で、調整のあり方も本遺跡には見られない特徴¹²⁾をもった一群も見られる(第277図: 1~4・6)。また、SD4のように本遺跡と異なった特徴の須恵器のみが出土する遺構も存在する(第276図:11・12)。他の遺構や包含層からも、本遺跡出土資料と類似した須恵器と、異なった特徴をもつ須恵器の両者が出土している。報告遺物を実見した限りでは、本遺跡類似資料とそうでない資料の割合は、ほぼ半々といったところである。名和衣装谷遺跡からは須恵器は少量しか出土しておらず、その様相には不明点が多い。ただし、少なくとも、茶畑六反田遺跡同様、本遺跡出土資料に類似する特徴をもった須恵器と、そうでない須恵器の両者が存在することは確認できた。

以上のように、下市築地ノ峯東通第2遺跡と同時期の須恵器が出土した汗入郡内遺跡の資料を概観したところ、いずれの遺跡にも本遺跡から供給された須恵器が含まれる可能性が考えられた。そこで、この点を最も出土量のまとまっている杯の法量分析によって検証した(第278図)。

散布図に示したように、消費地出土資料の法量分布は、下市築地ノ峯東通第2遺跡の須恵器窯関連遺構群出土資料の分布範囲に収まるものが大半ながら、一部に外れるものがある。上淀廃寺出土資料をはじめとして、分布範囲から外れたものは、すでに確認したように、胎土・焼成・調整の特徴が本遺跡出土資料とは異なったものである。なお、本須恵器窯関連遺構群の分布範囲に収まっているもののなかにも、本遺跡出土例と特徴が異なっているものもあるが、逆に本遺跡出土例に類似した特徴をもつもののなかでこの範囲に収まらないものはない。したがって、胎土や焼成、調整が類似した資料については、形態的特徴も本遺跡の窯跡群で生産されたと推定する上での必要条件を満たしているといえる。

このように、下市築地ノ峯東通第2遺跡の須恵器窯で生産された須恵器は、上淀廃寺や茶畑六反田遺跡など、汗入郡内に広く流通していたと考えられる。したがって、本遺跡の窯で生産された須恵器は、近隣集落群内での自家消費ではなく、経営主体による再分配か経営主体を通じた商品的流通によって、少なくとも郡レベルでの流通があった可能性が高い¹³⁾。また、消費地の須恵器の特徴からは、本遺跡以外にも供給元となる窯が存在したと考えられるため、汗入郡域の須恵器は同時期に複数の生産

地から供給された可能性が考えられる。

(2)胎土分析の結果から見た消費地の推定

本遺跡の須恵器窯関連遺構群から出土した須恵器や瓦は、白石純氏によって胎土分析が行われており、あわせて周辺の奈良時代から平安時代遺跡の胎土分析結果との比較が示されている(第7章第7節)。詳細は白石氏の報文を参照されたいが、茶畑六反田遺跡出土遺物の胎土分析結果との比較も行われているので、遺物の観察から行った消費地の推定を、胎土分析の結果から検証してみたい。

本遺跡出土須恵器と近隣の窯跡出土須恵器の微量元素比の分布範囲を比較すると、本遺跡試料の分布領域が他の窯跡試料の分布領域と重なりながら、広い領域を形成することが分かる(第330図)。このため、消費地試料の胎土分析結果をあてはめる上では、不利な分析結果となっている。ただし、細かく見ると、本遺跡の分布範囲のうち、ストロンチウム量が多く、カルシウム量が少ない部分では、鳥越窯跡群とは排他的な領域が形成されている。また、他の窯跡の分布範囲にも、完全に本遺跡の範囲に重なるものがある一方で、大井窯跡群、鳥越山窯跡群、木舟窯跡群では、本遺跡とは重ならない領域が十分存在するものもある。このそれぞれの窯の排他的な領域内に消費地試料が収まれば、該当する窯での生産の可能性が高いと判定できる。

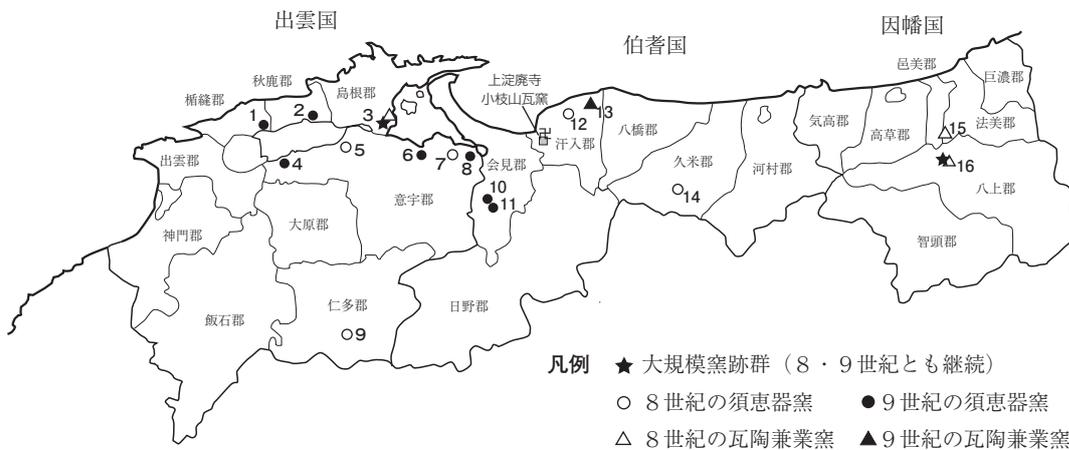
さて、こうした前提で茶畑六反田遺跡の分析結果を見てみると、須恵器試料はすべて本遺跡と大井窯跡群の双方が重なる領域内に分布している(第331図)。したがって、茶畑六反田遺跡の分析された須恵器は、本遺跡で生産された可能性と大井窯跡群で生産された可能性をともにもっている。なお、参考までに若干古い時期の須恵器を分析した遺跡のデータも比較している。これによれば、本遺跡の領域に収まるものはいくらか見られるものの、他の窯領域と排他的な範囲に分布する例は見られない。

以上のように、胎土分析からは本遺跡での生産品の供給先を確定できないものの、少なくとも、本遺跡から近隣遺跡への供給の可能性を否定する結果は示されていない。

4 山陰中部における平安時代の須恵器生産

(1)須恵器窯の分布と消長(第279図、表101)

これまで、下市築地ノ峯東通第2遺跡窯跡群での須恵器の生産内容や、その供給先を検討してきた。



1: 木舟窯跡群 2: 古曾志平迫田遺跡 3: 大井窯跡群 4: 小松古窯跡群 5: 湯峠窯跡 6: 渋山池遺跡
7: 廻谷窯跡 8: 門生黒谷遺跡 9: 大内谷窯跡 10: 高姫窯跡群 11: 両部太郎窯跡 12: 栃原窯跡
13: 下市築地ノ峯東通第2遺跡 14: 鳥越山窯跡群 15: 紙子谷遺跡 16: 私都窯跡群

第279図 山陰地方の古代須恵器窯の分布(8～9世紀)

表101 山陰地方の須恵器窯の消長

推定年代 (A.D)			500	600	700	800	900
国	郡	窯跡 (群)	年				
出雲	意宇郡	門生	—————				—————
		廻谷				-----	
		渋山池					—————
		渋ヶ谷	—————	-----?			
		湯峠				-----	
	小松					—————	
	鳥根郡	大井窯跡群★	—————	-----	—————	-----	—————
		法吉長谷		-----?			
	秋鹿郡	古曾志平迫田					—————
	楯縫郡	木舟					—————
深谷		-----					
仁多郡	大内谷				-----		
伯耆	会見郡	両部太郎					-----
		高姫		-----			-----?
	汗入郡	枋原※				-----?	
		下市第2★					—————
	久米郡	鳥越山		—————	—————		
河村郡	埴見	-----					
因幡	高草郡	中村		-----			
		七谷	-----	-----			
	法美郡	越路			-----		
		紙子谷★				—————	
	八上郡	私都窯跡群★		—————	—————	—————	—————
天神原			-----				

凡例 —————: 窯が検出されているもの

-----: 遺物から窯の存在が推測されているもの

.....: 遺物が少量認められるものの窯の存在は不明 (大井窯跡群のみ)

太字は複数支群を有する大規模な窯跡群 ★は瓦陶兼業窯、またはそれを含む窯跡群

※枋原は炭焼窯の可能性もある。時期も確実ではない。

丹羽野・平石2010を参考に、伯耆・因幡の事例を追加して作成。

推定年代もこれに従っているが、地域間での編年の併行関係は確定しておらず、伯耆・因幡の時期的位置付けは厳密ではない。

ここでは、本遺跡の窯跡群を山陰地方中部の同時期の須恵器窯跡(群)の様相と比較することで、少し広い視点から本遺跡での須恵器生産の特質を考えてみたい。

まず、山陰中部と因幡での須恵器生産の展開の概略を確認しておきたい(表101・第279図)。調査例の多い出雲では、大井窯跡群の生産形態の変化を軸としながら、須恵器生産が展開したことが明らかにされており、次のような流れが確認されている(内田1990、丹羽野・平石2010、柳浦1986・1989)。まず、古墳時代に複数の窯場で須恵器生産が行われていたのが、7世紀に入ると生産が大井窯跡群にほぼ集約され、8世紀前半頃までその独占生産に近い状態が続く。その後、8世紀後半頃から大井窯跡群の独占状態が崩れ始め、9世紀には各地に多くの窯場が形成されるようになって、生産形態が大きく変化する。多地域での須恵器生産が盛んになった後、10世紀初めごろには須恵器生産自体が終焉している。

伯耆と因幡は調査例が少なく不明な点が多いものの、伯耆は出雲と須恵器生産のあり方が連動する可能性があるのに対し、因幡は出雲とは異なった様相を示すようである。

伯耆でも古墳時代には複数の窯場での生産が行われている。7・8世紀になると東伯耆では鳥越山窯跡群のみで生産が行われる。西伯耆では今のところ7・8世紀前半の窯場は確認されていない。その後、9世紀に西伯耆で多くの窯場が形成されるようになり、10世紀はじめごろには須恵器生産が終焉する。因幡でも、古墳時代には多地域で生産が行われており、7・8世紀には私都窯跡群にほぼ生産が集約される¹⁴⁾。その後の展開は、出雲や伯耆とは異なっており、9世紀に入っても私都窯跡群で

の集約的な生産が継続し、さらには少なくとも10世紀の前半頃までそのまま須恵器生産が行われたようである。

このように、各地とも、飛鳥・奈良時代を中心に特定の窯場に生産が集約する共通点が見られる。出雲の大井窯跡群は、7世紀から8世紀前半にかけて集約的な生産体制をとっており、在地郡司と出雲中枢の国造系郡司による経営、統制を想定する見解が示されている(内田1990、丹羽野・平石2010)。また、律令期の鳥越山窯跡群も、生産規模は小さいものの、後述するように製鉄との複合生産体制にあったことを踏まえれば、出雲同様、郡司などの「官」につながる在地支配者層の経営にあっ

表102 窯の規模と生產品目

遺跡名	窯	時期	構造	規模(m)		生產品目			
				水平長	最大幅	小型品	中型品	大型品	瓦
門生黒谷	1号窯	A期	地下式	△3.3	1.03	杯・皿	壺類・鉢	-	-
洪山池遺跡	須恵器窯1	B期	地下式	△2.58	1.08	杯・皿	壺類	-	-
洪山池古墳群	1号窯	B期	不明	△2.7	1.13	-	-	甕	-
小松古窯跡 ^{※1}	1号窯	A期	不明	△4.2	△1.3	杯・皿	壺類・鉢 平瓶	甕	-
	2号窯	A期	不明	△4.0	△1.88				
	3号窯	A期	不明	不明	△1.8				
大井窯跡群	池ノ奥6号窯	B期	半地下式	△3.5	1.5	杯	鉢・小型甕	-	-
古曾志平迫田遺跡 ^{※1}	1号窯	B期	不明	△7.6	△1.3	杯・皿	壺類・平瓶	甕	-
	2号窯	B期	不明	不明	△1.5				
	3号窯	B期	地下式	3.61	1.17				
木舟窯跡群 ^{※2}	1A窯	A期	半地下式	△2.85	1.15	杯・皿	壺類・鉢 平瓶	甕	-
	1B窯		半地下式	△2.1	1.3				
	2A窯	A期	半地下式	△3.25	不明	杯	壺類	-	-
	2B窯		半地下式	△3.38	1.46				
	2C窯		半地下式	△3.97	1.28				
	3号窯	A期	半地下式	△4.64	1.93	杯	壺類	-	-
	4号窯	A期	半地下式	△5.96	2.07	杯	壺類	甕	-
	5号窯	A期	半地下式	△4.6	2.03	杯・皿	-	-	-
	6号窯	A期	半地下式	△2.1	1.45	杯・皿	壺類	甕	-
	7号窯	A期	半地下式	不明	1.08	杯・皿	壺類・鉢	甕	-
	8A窯	B期	半地下式	△3.71	1.38	杯・硯	壺類・鉢	-	-
8B窯	半地下式		△2.17	1.2					
下市築地ノ峯東通第2遺跡	窯1	B期	半地下式	△4.2	1.4	杯・皿	壺類	-	補修瓦
	窯2	B期	半地下式	6.8	1.6	杯・皿	壺類・小型甕	-	補修瓦
	窯3	B期	地下式	7.0	1.8	杯	壺類・鉢	甕	-
私都窯跡群	山田10号窯	B期～	半地下式	3.3	0.78	杯・皿	-	-	-
	山田12号窯	B期	半地下式	△2.26	0.86	杯・皿	鉢	-	-

凡例 ・時期は丹羽野編年(丹羽野2005)による。

- ・構造の「地下式」は地下窯体掘り抜き式窖窯、「半地下式」は半地下天井架構式窖窯を表す。
- ・規模の△は残存値または検出範囲内での計測値。太字は「大型」(長さ5m・幅1.5m以上)の窯。
- ・生產品目のトーンは生産量の相対的比率を示す。濃いほど多い。量比不明の場合はトーン無し。

※1：小松古窯跡と古曾志平迫田1・2号窯は窯内部を調査しておらず、出土遺物がほとんど見られない。そのため、生產品目には周辺灰原出土器種も含めたが、どの窯に伴うかものか不明なため一括して示した。

※2：木舟窯跡群の生產品目とその量比については不明な点が多いが、報告された窯出土器種を示した。

た可能性は十分に考えられるだろう。なお、その生産量が少なさは東伯耆では須恵器利用が低調であったことに起因する可能性がある。西伯耆での7・8世紀の窯場の不在は、かねてより大井窯跡群の存在から解釈されてきた。須恵器の形式・型式の類似性(柳浦1989など)や胎土分析の結果から、西伯耆では大井窯跡で生産された須恵器が多く供給されていた可能性が考えられている。因幡の私都窯跡群では、大井窯跡群と同等の大規模な窯場が形成されており、国衙か郡司の関与する集約的な生産体制が想定できよう。

出雲では集約的な生産体制が8世紀後半以降に崩れ、9世紀には各地に比較的小規模な窯場が形成される。この時期には、西伯耆でも下市築地ノ峯東通第2遺跡の窯跡群などの窯場が複数形成される。奈良時代までの西伯耆と出雲の須恵器生産・流通の一体性を前提に考えれば、大井窯跡群での集約生産終了に伴って、西伯耆へも須恵器生産の地域化が波及した可能性が考えられるだろう。このように、出雲・西伯耆では平安時代に窯場の分散が起こり、生産・流通圏の地域化が進んだことが分かる。そして、それは大井窯跡群の大規模な集約生産体制の終焉と連動した現象であったと理解できるだろう(丹羽野・平石2010)¹⁵⁾。

(2) 窯の規模と生産品目(表102)

以上のように、平安時代の須恵器生産形態は、飛鳥・奈良時代とは大きく変質していることが推察される。ここでは、山陰中部における平安時代の須恵器生産の様相を検討してみたい。

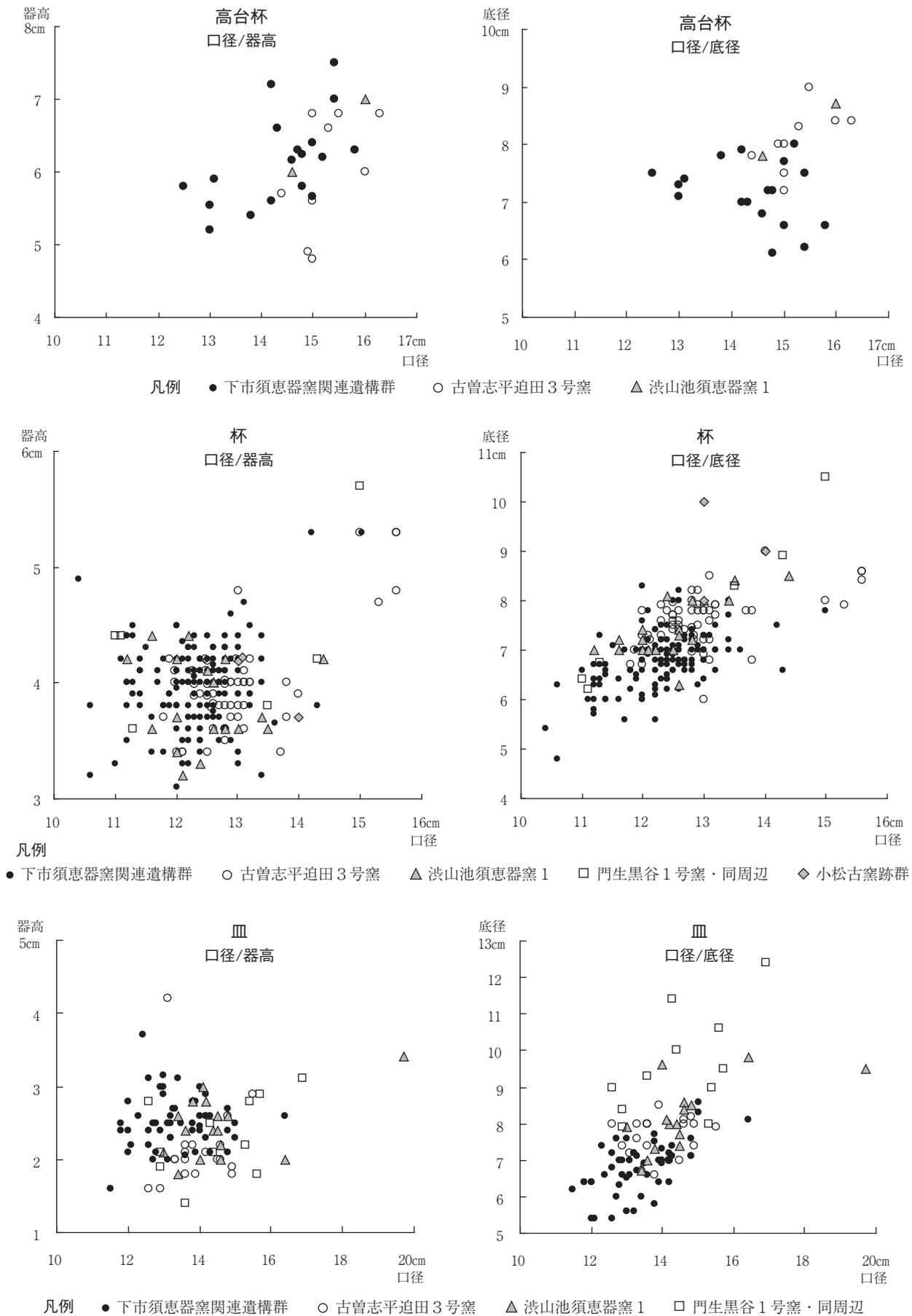
表102に、平安時代の須恵器窯の構造や規模と生産品目の関係を示した。平安時代の須恵器窯は、奈良時代までと比べて全般に小型化することが指摘されている(池澤2010)。そのなかでも相対的に小型の窯と大型の窯が存在し、前者の方が多いことが分かる。また、窯の構造は、地下窯体掘り抜き式窖窯と半地下天井架構造式窖窯の両者が並存しており、その造り分けと窯の規模や生産品目の違いとは関連がないように見える¹⁶⁾。

生産品目の構成からは、全般に小型品の生産が中心となっていることが分かる。中型品・大型品は、大型の窯で小型品とあわせて生産される例が多い(池澤2010)。これを時期別に詳しくみると、丹羽野編年A期には小型窯で小型品から大型品までの各種器種が生産される場合がままある一方、B期には小型窯はほぼ小型品の生産のみに特化している。B期の中型品・大型品生産は基本的に大型の窯で行われているが、その生産量は小型品に比べれば少ないようである。出土量比が具体的に把握された窯跡は下市築地ノ峯東通第2遺跡に限られるものの、おそらく他の窯跡でも本遺跡と同じく、小型品以外は多品目を少量ずつ需要に応じて生産していたと予想できる。また、B期には、洪山池遺跡須恵器窯1(鳥根県教育委員会1997)と洪山池古墳群1号窯(鳥根県教育委員会1998a)のように、小型器種専用窯と大型器種専用窯の完全分化も見られる。

このように、平安時代には、全般に規模の小さい窯で小型品を中心に生産していることが分かる。また、各窯跡の出土量をみる限り、生産量は少なく、飛鳥・奈良時代の大井窯跡群のような集約生産は行われていないと考えられる¹⁷⁾。こうした生産の様相は、先に確認した窯場の変遷過程と整合的であろう。

(3) 出土須恵器からみた工人集団(第280～283図)

平安時代の各窯跡から出土した須恵器には、窯毎に形態差や調整の違い、胎土や焼成の違いなどが見られる。こうした生産品の特徴は、それぞれの地域で生産活動を行った工人集団の違いや地域色として把握できる可能性がある。そこで、まとまった遺物が出土した出雲の古曾志平迫田3号窯(鳥根



第280図 窯跡出土杯皿類の量比較

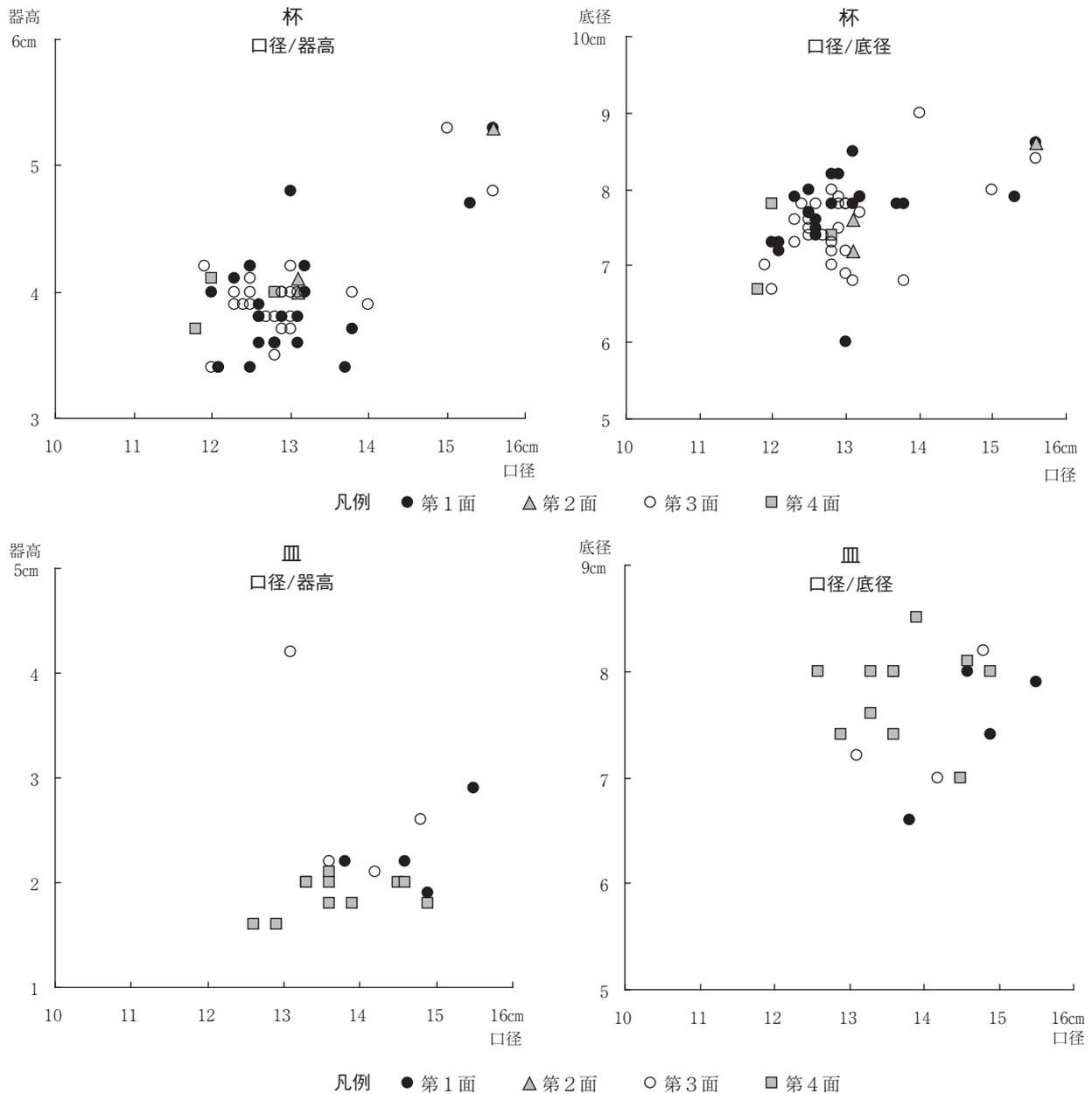
第6章 総括

県教育委員会1989)、渋山池須恵器窯1、門生黒谷1号窯跡(島根県教育委員会1998b)、小松古窯跡群(宍道町教育委員会1983)と下市築地ノ峯東通第2遺跡の資料を比較して、工人集団の違いや地域色の存在を確認してみたい。なお、これらのうち門生黒谷1号窯跡と小松古窯跡群が丹羽野編年A期に、他はB期に相当する。

先に示した本遺跡の須恵器窯関連遺構群の法量分析と同じ方法で、散布図を作成した(第280図)。これを見ると、窯(群)毎に形態差が存在していることが分かる。明確な時期差をもつ門生黒谷遺跡1号窯跡や小松古窯跡群出土資料とそれ以外での形態差を確認できるだけでなく、B期に帰属する3遺跡間でもそれぞれ微妙な形態差が存在している。

高台杯の分布を見ると、下市築地ノ峯東通第2遺跡と古曾志平迫田3号窯は分布領域を重ねつつも、本遺跡資料の方が僅かに口径・底径が小さい方向へと傾斜している。

杯は各遺跡とも出土個体数が多いため、その傾向を良く読み取ることができる。出土個体数の多い



第281図 古曾志平迫田3号窯出土杯・皿の法量分布

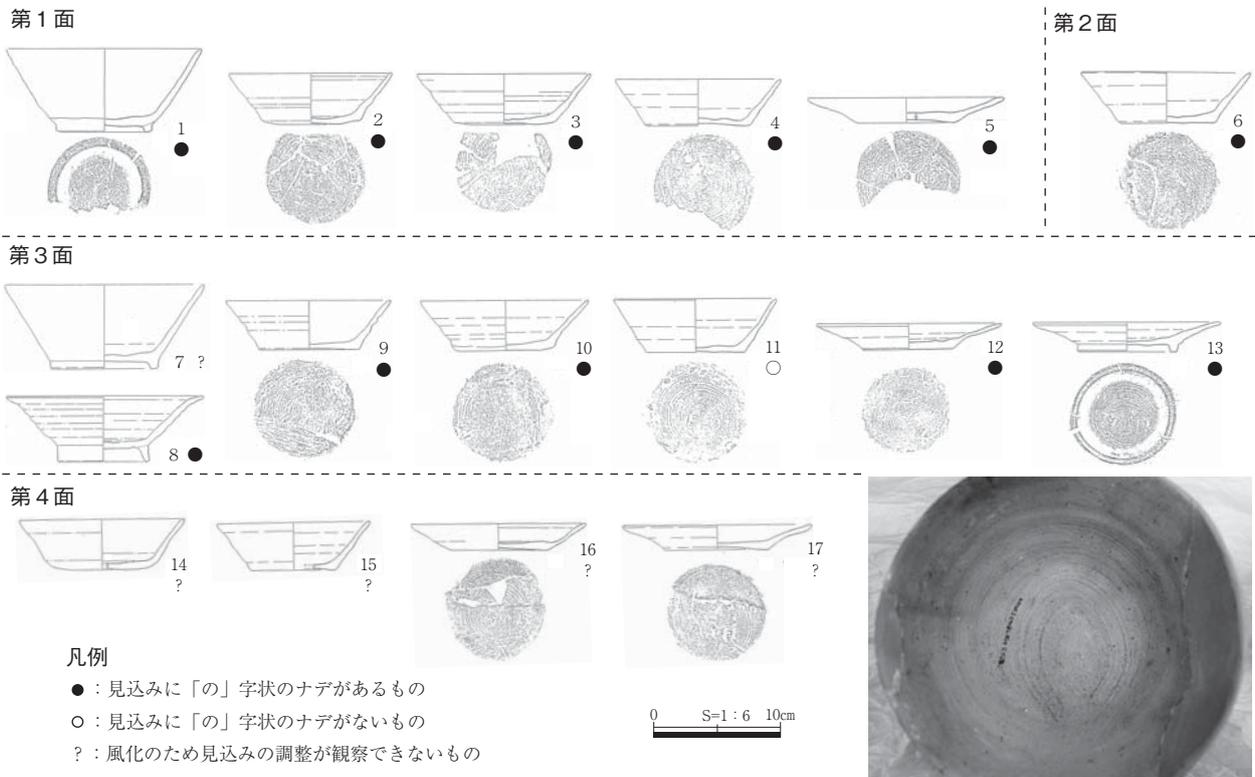
下市築地ノ峯東通第2遺跡と古曾志平迫田3号窯の出土資料は、高台杯と同じく分布を重ねながら、本遺跡資料が口径と底径が小さい方向へと分布範囲がスライドしている。洪山池須恵器窯1の資料は、口径・器高の散布図では下市築地ノ峯東通第2遺跡の分布範囲から古曾志平迫田3号窯の分布範囲まで広がるが、口径や底径の散布図では本遺跡と古曾志平迫田3号窯の分布が重なり合う領域付近にまとまって分布している。これらB期の3遺跡の杯の法量散布図からは、それぞれの遺跡毎に分布領域が非常に良くまとまっていることが分かる。

皿の散布図からも、杯同様、B期の3遺跡はそれぞれが分布のまとまりをもちながら、その領域が微妙に異なる傾向が読み取れる。

このように、法量分布からは、窯跡(群)毎に須恵器の形態がよくまとまっていること、そして窯跡(群)ごとに形態が若干異なっていることが確認できた。このことから、各窯の生産単位がまとまっていたことが推察でき、下市築地ノ峯東通第2遺跡窯2古段階出土資料の分析から推定したように、他のB期の2遺跡でも工人集団の規模が小さかった可能性が考えられる。また、窯跡(群)間での僅かな形態の違いは、工人集団の違いが反映されている可能性が考えられるほか、須恵器生産が地域化したことによって生じた須恵器の地域色を示すものとしても把握可能であろう。

以上の法量分析から推察した工人集団のあり方を、古曾志平迫田遺跡と洪山池須恵器窯1の資料をもう少し詳しく分析することで検証してみたい。

古曾志平迫田3号窯では床面が4面確認されており、少なくとも4回の須恵器焼成が行われたことが明らかにされている。この4つの面にはそれぞれの焼成に伴う須恵器が残置されており、なかには窯詰め状態を良く残したままの面も確認されている。したがって、焼成品の一括性は非常に高く、工人の人数などを推定する上では非常に有利な条件にある。



凡例

- ：見込みに「の」字状のナデがあるもの
- ：見込みに「の」字状のナデがないもの
- ？：風化のため見込みの調整が観察できないもの

※実測図は報告書（鳥根県教育委員会1989）より転載
 写真は鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター所蔵資料を撮影

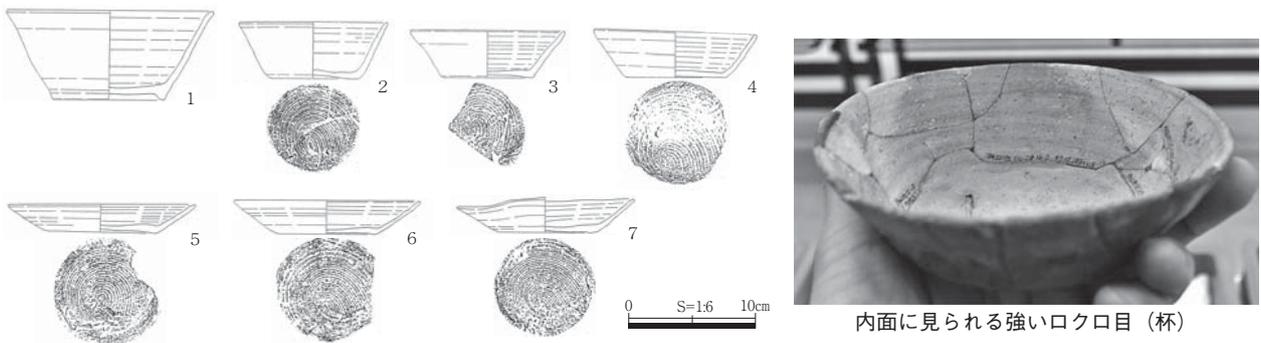
第3面出土杯(10)の見込みの調整

第282図 古曾志平迫田3号窯出土須恵器の特徴

古曾志平迫田3号窯出土杯・皿の法量散布図を、焼成面毎にマーク分けをして作成した(第281図)。この図からは、窯間で確認したよりは小さい差ながら、焼成面毎に分布領域がわずかにずれていることが確認できるほか、各焼成面の法量のまとまりが非常に良いことが分かる。4つの焼成面は、窯詰め状態がほぼ崩されないまま床面再生がされている点、それらの窯詰め方法が同じである点、後述するように細部調整の特徴が共通する点などから、時間的にはかなり短い期間で相次いで操業された可能性が高い。したがって、焼成面間での形態の僅かな違いは、時期的な形態変化(型式変化の過程)を示しているのではなく、須恵器製作の機会毎に形態が若干ぶれたことを示している可能性が高い。それぞれの製作単位内では形態は非常に良くまとまっているといえる。

古曾志平迫田3号窯出土資料でも、下市築地ノ峯東通第2遺跡窯2古段階出土資料のように、細部の調整の特徴から工人数を推定できる可能性が考えられたため、実際に資料を観察し、工人個人のクセに結びつきそうな特徴の抽出を試みた。しかし、古曾志平迫田3号窯の資料は焼成が非常に悪く、表面が風化した個体が多いため、糸切り痕やその他の細かな調整の特徴が観察できないものが多い。糸切り痕が観察できたものは基本的に下市築地ノ峯東通第2遺跡と同じ「左手離し糸切り」(小川1979)による可能性が高く、2個体の例外を除いて、糸切り痕の回転の中心がやや中央に寄っていることが確認できた。糸切り痕のほかに確認できた工人個人に結びつきそうな細部の特徴として、杯皿類の内面見込みに施された「の」字状のナデが挙げられる(第282図)。これは、観察可能な個体では、2個体の例外を除くすべてに施されていた。杯皿類すべての器種や形式に見られるほか、すべての焼成面資料に共通して見られる。このナデは見込み表面に軽く施されているに過ぎず、この調整に成形や整形の意味があるとは思えない。したがって、このナデは工人の個人的なクセと見なしうるものと考えた。仮に、複数の工人によるものであっても、このナデは細かな作り方の動作まで共有するごく小規模な工人集団によって残されたと考えられるだろう。また、それが複数面にわたって見られることから、3号窯は同じ工人集団によって短期間に操業されたと考えられるだろう。

洪山池須恵器窯1の須恵器は法量に幅があり、報告書で示された分類のとおり、大きさの作り分けがあったようである。したがって、法量分析からは工人規模を推定できない。一方、胎土や焼成、調整の特徴は出土資料すべてが極めて類似している。回転糸切りは「左手離し切り」によって行われており、確認できる限り、回転中心がやや中央に寄るもののみしか存在しない。特徴的なのは内面調整で、杯皿類ほぼすべての体部内面に強いロクロ目が観察できる(第283図)。この特徴は個人のクセの可能性も十分あるものの、表面整形としてはかなり目立つため、工人集団内での製作技術の共有と捉えた方がいいかもしれない。いずれにしても、調整の特徴に個体差が表れない程度の小規模な工人集団で



※実測図は報告書(鳥根県教育委員会1997)より転載
写真は鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター所蔵資料を撮影

第283図 洪山池須恵器窯1出土の須恵器

あったと推測しておきたい。

洪山池遺跡では、須恵器窯に隣接した集落域から窯出土資料に極似た須恵器が多く出土しており（鳥根県教育委員会1997）、集落(群)内生産・集落(群)内消費のような、極めて狭い流通圏が形成されていた可能性がある。実際に、洪山池須恵器窯1と同じ特徴の須恵器は、洪山池遺跡以外ではほとんど見られない。この点からも、地域化した須恵器工人集団が小規模な生産を行っていたことが確認できるだろう。

このように、出雲の平安時代須恵器窯でも、小規模な工人集団によって生産が行われていた可能性が高い。すでに確認したように、平安時代の須恵器生産は規模の小さい窯で比較的小規模に行われているので、工人組織もそれに対応したものであったと評価できるだろう。こうした生産形態は下市築地ノ峯東通第2遺跡と近似していることから、平安時代の山陰中部における須恵器生産形態の特質は、小規模な生産組織による比較的小規模な生産が、地域毎に行われた点にあるといえよう。

ところで、須恵器窯出土資料を比較すると、古曾志平迫田遺跡出土須恵器が下市築地ノ峯東通第2遺跡出土の須恵器と、製作技術や須恵器の形態において共通性が高いことに気付く。技術的な面では、両者ともよく水簸された粘土を用いる点に特色がある。この特徴は洪山池では見られないほか、汗入郡内の消費地資料の観察で見たように、この時期の須恵器の一般的特徴とはいえない要素である。また、成形技術も、両者とも小型品は粘土塊水挽き成形による可能性も考えられるほか、ロクロの回転方向や糸切り手法なども共通している。ただし、これらについては洪山池須恵器窯1もほぼ同じ特徴を示すので、同時期の山陰中部で広く共通する技術的特徴の可能性もある。古曾志平迫田遺跡と下市築地ノ峯東通第2遺跡の共通性を最も良く示すのは、その形態である。すでに法量分布で確認したように、下市築地ノ峯東通第2遺跡の杯皿類が古曾志平迫田遺跡のものより僅かに小さい傾向にあるものの、そのプロポーシオンは極めて類似している。その一方で、下市築地ノ峯東通第2遺跡と地理的に近い洪山池須恵器窯1との間には、細部の調整や形態に共通性が見られない。今後さらに検討が必要とは考えられるものの、現状では、下市築地ノ峯東通第2遺跡の須恵器製作技術や工人集団の系統や系譜は、古曾志平迫田遺跡のそれと同じであった可能性を考えておきたい。

古曾志平迫田遺跡が所在する古曾志周辺は、大井窯跡群での須恵器生産の管掌郡司の本貫地と考えられている（内田1990、丹羽野・平石2010）。したがって、大井窯跡群の集約生産解体後、経営主体の本貫地であり、おそらく一部の工人集団の本貫地でもあった古曾志周辺で須恵器生産を行ったのが古曾志平迫田窯跡群と考えられる。こうしたことから、下市築地ノ峯東通第2遺跡での平安期における須恵器生産には、出雲において飛鳥・奈良時代の須恵器生産を主導していた大井系須恵器工人が、直接的、あるいは間接的に関与していたと評価したい¹⁸⁾。

このように、工人集団の系譜からも、下市築地ノ峯東通第2遺跡での須恵器生産の開始は、9世紀前後の出雲で起こった集約生産の解体と生産の地域化という生産形態の変化に連動したものであったことが追認できよう。

【註】

- 1) ここでは、窯跡群の変遷を3つの窯の変遷として整理したが、例えば窯3→窯1古段階→窯2古段階→窯1新段階→窯2新段階というような、窯段階ごとに複雑な変遷をたどっていた可能性がないわけではない。ただし、一般的に、同時期の窯では床面の修復は操業過程で比較的短期間に連続して行われる場合が多いため、こうした複雑な変遷は想定しなかった。

第6章 総括

- 2) 第5章で述べたように、窯跡内出土の須恵器の全てが、その窯の焼成品とは限らない。特に窯1は最終操業時の焼成品ではないものを多く含んでいる。したがって、ここに示した資料が全て確実に各窯段階に帰属しているわけではない。
- 3) なお、土器破面に粘土の縞模様（流文構造）が表れた場合には、それが粘土塊水挽きによるものか、紐積み水挽きによるものかを区別できる可能性が示されているが（北野 2001b）、本遺跡からは後述する壺以外にこうした構造が観察できる須恵器は出土していない。
- 4) この手法は東海地方の古代の長頸壺でも見られるようであり、その詳細な観察と製作過程の推定が尾野善裕氏によって示されている（尾野 2001）。
- 5) ここで行った方法には仮定しなければならない前提が多い点など、問題点がいくつか存在している。しかしながら、具体的なイメージを得ることが重要と考えて、あえてこうした推定を行ってみた。
- 6) 高台杯の個体数推定には分類番号②からもデータを採る必要があったが、出土数が39点と非常に少なく有意なデータが得られなかったため、推定に用いなかった。したがって、実際はこの推定数より多少は個体数が多くなるだろう。ただし、もともと②の数はかなり少ないので、ほとんど数字に変化はないはずである。また、この推定数は高台杯の完形個体重量を用いて計算したものであるが、③には突帯付高台杯の破片も存在するため、高台杯のみの正確な推定数ではない。突帯付高台杯は完形個体が1点しか存在せず、個体によって大きさがかなり異なっているので、個体数の推定は行わなかった。ちなみに、①の破片は小片のものが多く、これを見る限り①・③の破片から推定できる突帯付高台杯は多くても20~30個体程度にしかないのではないかと考えている。
- 7) 実際には大きく見積もって灰原の3分の1ほどが破壊されている可能性がある。ただし、そこに包含されていた須恵器の全てが失われたわけではなく、表土・耕作土から回収できたものもあるので、廃棄量の3分の1もが失われてしまったわけではないだろう。このように、実際の須恵器廃棄量と出土須恵器量にどれだけの開きがあるかは不明と言わざるを得ない。
- 8) 杯には一般的なものより一回り大きい形式のものが含まれている。ただし、その数は非常に少ないため、全体の統計値に与える影響は小さいと判断し、形式別には統計処理していない。
- 9) なお、ここで確認した標準偏差は全体に小さい値と考えられるが、標準偏差自体が相対的な値であるため、比較のために消費地での標準偏差を計算した。その対象としたのは、近隣の平安時代遺跡でもっとも遺物量がまとまっている、茶畑六反田遺跡出土の本遺跡と同時期の須恵器杯である。計算の結果、標準偏差の値は口径で1.01（母数18）、底径で0.83（母数14）、器高で0.51（母数8）となり、いずれも本遺跡出土の杯の全体での標準偏差の値よりもかなり大きいことが確認できる。
- 10) b類とc類の口縁形態は明確に識別できるものが多いものの、一部にあいまいなものも含んでいる。また、b類に分類したもののなかに、糸切りの特徴が共有しないものを含んでいるのも、口縁形態による分類にあいまいさがあったためかもしれない。このように、b・c類に分類されたものは、a類ほど明瞭な特徴を共有しているわけではない。
- 11) 実験は陶芸用粘土を用いて、陶芸用手回し回転台の上で回転させながら、藁の撚り紐によって糸切りを行った。糸切りの方法はいく通りか試したが、最も出土資料に近い糸切り痕が生じたのは先述の「左手離し切り」（小川 1979）手法によるもので、具体的には以下の手順で行った。①回転台は本遺跡資料のケズリ・ナデの回転と同じ時計回りに回転させる。②粘土底部の手前側に撚り紐を当てて（差し込んで）、右手に撚り紐を保持したまま、左手を離す。③回転によって撚り紐が底部に巻きついてから、撚り紐を手前に引き、回転台から切り離す。なお、小川貴司氏の実験では、離し切りの場合、糸を引くタイミングで糸切り回転の中心位置が変化するとされているが（小川 1979）、今回の実験では再現できず、回転中心位置の変化は糸の底部への差し込みの程度に起因すると判断した。もっとも、さらに条件を変えながら実験を行えば小川氏の実験結果が再現できる可能性が高いと考えられ、いずれの原因によるものかの検証もできるだろう。いずれにしても、糸切り回転の中心位置が工人（個人または集団）のクセによるとの解釈には問題がないと考えている。なお、この実験は、陶芸に習熟した本センターの原田克美文化財主事の指導を受けながら行った。
- 12) 底部を均等に薄く仕上げ、内面の体部立ち上がり部分にはっきりと角度を付けている。本遺跡のものより全般に丁寧な調整が施されているような印象を受ける。
- 13) 遺跡の全容は明らかではないものの、平安時代の集落が形成されていた可能性がある近隣の下市前築地遺跡からは本遺跡窯跡群の製品に類似した須恵器が出土しており（鳥取県埋蔵文化財センター 2012）、近隣集落でも本窯跡の製品が使われた可能性が高い。
- 14) 私都窯跡群と並存する紙子谷遺跡窯跡は瓦陶兼業窯であり、主として因幡国庁などを含む法美郡の官衙・寺院への供給を目的に操業されたと考えられている。その性格から考えて、私都窯跡群と競合する存在ではないと言える。したがって、律令期には私都窯跡群での集約生産が行われていたという評価には問題がないだろう。なお、

当然ながら紙子谷遺跡窯跡も官の関与する生産体制をとっていたと考えられるため、この時期の因幡の須恵器生産は全般に官營的色彩が強いと理解できる。

- 15) 下市築地ノ峯東通第2遺跡の東隣の丘陵東斜面を中心に展開する殿河内ウルミ谷遺跡では、谷底部分のトレンチ調査で古墳時代末から奈良時代にかけての須恵器が大量に出土している（鳥取県埋蔵文化財センター 2011）。須恵器の中には歪んだ個体や粘土が溶着した個体が含まれており、近隣に窯があった可能性がある。ただし、7～8世紀頃の土師器も大量に出土しているため、出土した須恵器の全てが窯関連資料ではないようである。トレンチ調査で出土した窯変個体のなかで時期が分かるものはいずれも TK209 型式併行で、古墳時代に位置付けられるものであった。ただし、7世紀前半に位置付けられる須恵器の量もかなり多いため、律令期までその生産が続いていた可能性も完全には否定できない。その場合、大井窯跡群での集約生産を前提とした本稿の見解を見直す必要がある。殿河内ウルミ谷遺跡は本調査を当センターが行う予定であるため、本調査の成果を待って検討する必要があるが、殿河内ウルミ谷遺跡に窯が存在した場合、下市築地ノ峯東通第2遺跡の評価で変更すべき点をいくつかの可能性ごとに示しておきたい。①殿河内ウルミ谷遺跡に古墳時代の窯が存在していた場合は、本遺跡の評価に大きな変更はない。大井窯解体後、窯業生産に向いていた土地に再び窯場を設けたと理解できよう。②律令期全般を通じて伯耆の中心的な窯場として集約的な須恵器生産が行われていた場合は、本稿の議論の前提は成り立たない。ただし、出土須恵器の時期からは、この可能性はあまり高くはないと考えている。少なくとも大井窯跡群や私都窯跡群のような生産量の窯跡群が、これまでの分布調査や発掘調査で全く発見されていない可能性はかなり低いだろう。③律令期にも断続的に小規模な生産が行われていた場合、それが大井窯跡の集約生産のピーク時とどのような時間的關係になるかによっても評価が分かれるだろう。それが律令期初期に限られ、大井窯跡群への集約化の進行に伴って窯業生産が停止した場合は、①の場合と同じく本遺跡の評価はあまり変わらないといえる。大井での集約生産期と併行していた場合は、地域的な需要に応じて断続的に操業していた可能性を考えておきたい。それが大井系須恵器工人との関連のもと、大井の須恵器生産と補完性をもって行われていれば、本稿での評価を根本的には変更しなくてもよいと思われる。そうではなく、自律的な生産が行われていた場合には、本遺跡を伝統的、在地的な窯業生産地での生産展開の一コマとして評価する必要があるだろう。これらについては、本調査を踏まえて検討する必要がある。
- 16) 本遺跡の窯1・2のような、側壁礫をもつ半地下天井架構造式窯（山田氏（2010）の用語では「石組側壁窯」）は山陰には他に存在しない。類似した構造の窯は信濃に多く分布している。また、播磨にも一定数側壁礫をもつ須恵器窯が存在する（山田 1999・2010）。ただし、播磨の例は、焚口を中心に礫積みを施したもので、本遺跡例とは構造が異なる。このように、本遺跡の例を他地域からの技術的影響と考えるには地域的な隔たりが大きい。本遺跡で最初に築かれた窯3が同時期の出雲に通有の地下式管窯であったことを考えると、窯1・2の側壁は窯構造を半地下式に転換するにあたって独自に構造を工夫した結果として理解できるかも知れない。本遺跡の窯が築かれたローム質土壌は耐火度が非常に低いことが確認されており、これを克服するための工夫であったとも考えられよう（第7章第6節参照）。なお、その際に、播磨の焚口に礫積みを施す築窯技術に影響を受けた可能性は十分あろう。
- 17) 木舟窯跡群（平田市教育委員会 2004）は窯跡の数から考えて、生産量がかなり多かった可能性がある。これを集約的な生産形態と捉えるかどうかは、山陰中部の平安時代の須恵器生産形態の評価に大きく関わってくる重要な問題である。これについては、不明点の多い木舟窯跡群の具体的な生産内容を明らかにしたうえで改めて考察する必要がある。
- 18) 大井系工人はもちろん大井の地でも須恵器生産を続けているだろう。大井窯跡群で確認されている平安時代の池ノ奥6号窯跡から出土した須恵器（丹羽野編年B期）は、下市築地ノ峯東通第2遺跡や古曾志平迫田遺跡の須恵器とは異なった形態をとっており、他の出雲の資料と比較しても地域色の強い形態にみえる。ただし、他に未発見の窯跡が存在する蓋然性は高く、大井窯跡でも奈良時代までの工人集団の本流を受け継ぐ工人集団が生産を継続していた可能性もあろう。ここでは、大井系工人の本流が大井にあるのか、古曾志にあるのかという点は特に問題にしておらず、大井に源流をもつ工人集団が下市築地ノ峯東通第2遺跡の須恵器生産に関与した可能性がある点が重要と考えている。なお、古曾志と大井の關係とその歴史的评价や下市築地ノ峯東通第2遺跡と古曾志平廻田遺跡の関連性については丹羽野裕氏に重要なサジェスションをいただいた。また、4項での議論は丹羽野・平石論文（2010）を下敷きに展開していることを明記しておく。

【引用参考文献】

- 足立克己・丹羽野裕1984「遺物」『高広遺跡発掘調査報告書』鳥根県教育委員会
池澤俊幸2010「中国・四国」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』窯跡研究会

第6章 総括

- 内田律夫1990「『出雲風土記』大井浜の須恵器生産(下)」『古代学研究』120 古代学研究会
- 岡田裕之・土器検討グループ2010「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』島根県古代文化センター
- 小川貴司1979「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』第26巻第1号 考古学研究会
- 尾野善裕2001「東海地方における須恵器製作技法の転換とその背景－猿投窯を中心に－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換－』古代の土器研究会第6回シンポジウム 古代の土器研究会
- 木立雅朗 2010「実験考古学から見た須恵器窯の築造と焼成2－実験考古学と民俗考古学－」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』 窯跡研究会
- 北野博司 2001a「須恵器の成形技法」『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会
- 北野博司2001b「須恵器製作技法研究の現状と課題」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換－』古代の土器研究会第6回シンポジウム 古代の土器研究会
- 財団法人鳥取県教育文化財団2002「茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡・富岡播磨洞遺跡・安原溝尻遺跡」
- 財団法人鳥取県教育文化財団2003「名和衣装谷遺跡」
- 財団法人鳥取県教育文化財団2004「茶畑六反田遺跡(0・5区)」
- 島根県教育委員会1989『古曾志遺跡群発掘調査報告書』
- 島根県教育委員会1997『洪山池遺跡・原ノ前遺跡』
- 島根県教育委員会1998a『洪山池古墳群』
- 島根県教育委員会1998b『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』
- 宍道町教育委員会1983『小松古窯跡群範囲確認調査報告書』
- 田中琢1964「須恵器製作技法の再検討」『考古学研究』第11巻第2号 考古学研究会
- 田中琢1967「畿内」『日本の考古学』Ⅵ 歴史時代(上) 河出書房
- 田辺昭三1981『須恵器大成』 角川書店
- 鳥取県教育委員会1984『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2011『樋口西野末遺跡・下市天神ノ峯遺跡』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2012『松河原上奥田第2遺跡・下市前築地遺跡』
- 中森祥・日置智2004「因幡・伯耆(鳥取県)の須恵器窯」『須恵器窯跡構造資料集2』 窯跡研究会
- 丹羽野裕2004「出雲の須恵器窯」『須恵器窯跡構造資料集2』 窯跡研究会
- 丹羽野裕2005「出雲における9～10世紀の須恵器の様相」『平安時代前期の土器様相』第4回山陰中世土器検討会資料集 山陰中世土器検討会
- 丹羽野裕・平石充2010「出雲・大井窯跡群の様相と生産体制試論」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』 窯跡研究会
- 平田市教育委員会2004『木舟窯跡群』
- 柳浦俊一1986「出雲地方の須恵器生産」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
- 柳浦俊一1989「出雲・大井古窯跡群の須恵器生産と流通」『島根考古学会誌』第6集 島根考古学会
- 柳浦俊一2001「島根県東部(出雲)の切り離し技法と長頸壺頸部接合法」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換－』古代の土器研究会第6回シンポジウム 古代の土器研究会
- 山田真一1999「信濃における須恵器生産の展開と窯構造」『須恵器窯の技術と系譜－豊科・信濃・日本列島－』豊科町郷土博物館・窯跡研究会
- 山田真一2010「石組側壁窯の分布と系譜」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』 窯跡研究会
- 淀江町教育委員会1995『上淀廃寺』

第3節 瓦の生産と供給

下市築地ノ峯東通第2遺跡で確認された窯跡のうち窯1・2は9世紀後半に操業された瓦陶兼業窯である。焼成された瓦は当時周辺に存在していた官衙や古代寺院に供給されたとみられる。ただし、瓦当文様をもつ軒瓦は出土しておらず、供給先を特定することは容易ではない。そこで、本節では出土瓦の大部分を占める平瓦・丸瓦について比較検討を行い、本遺跡における瓦生産の特徴を明らかにしたうえで供給の問題に迫りたい。

1 平・丸瓦の分類

まず、平瓦、丸瓦の分類については第5章第2節で示しているが、改めて整理する。平瓦、丸瓦とも製作技法よりも法量に差違を見出せることから、とくに厚さを基準にし、以下Ⅰ～Ⅳ類の4種類に分類した¹⁾。

平瓦

- Ⅰ類 厚さが3.5cm以上の厚手のもの。なかには5cmを超える分厚いものもある。大きさは側面長50cm前後、広端長32cm前後、狭端長28cm前後に復元される。
- Ⅱ類 厚さが3.0～3.4cmのやや厚手のもの。大きさは平瓦Ⅰ類とほぼ同じとみられる。
- Ⅲ類 厚さが1.6～2.9cmの一般的なのもの。大きさからⅢa類とⅢb類に細分される。Ⅲa類はⅠ・Ⅱ類と同じ大きさで、Ⅲb類は側面長32cm前後、広端長20cm前後、狭端長16～18cm前後と一回り以上小さい。
- Ⅳ類 厚さが1.5cm以下の薄手のもの。なかには1cm以下のものもある。大きさは広端長20cm前後、狭端長15cm前後で、Ⅲb類とほぼ同じ大きさである可能性が高い。

丸瓦

- Ⅰ類 厚さが3.5cm以上の厚手のもの。大きさを復元できる個体はないが、端面長は17、18cm前後とみられ、Ⅲ類よりも一回り大きい可能性がある。
- Ⅱ類 厚さが3.0～3.4cmのやや厚手のもの。大きさはⅠ類と同一とみられる。
- Ⅲ類 厚さが1.6～2.9cmの一般的なのもの。大きさは広端長14～15cm、狭端長11～12cm前後である。側面長は不明である。
- Ⅳ類 厚さが1.5cm以下の薄手のもの。平瓦と同様に1cm以下のものもある。大きさは端面長が10～15cm前後と幅あるが、Ⅲ類より僅かながら小さい可能性がある。

次に、平瓦と丸瓦の組み合わせであるが、基本的に平瓦Ⅰ～Ⅳ類が丸瓦Ⅰ～Ⅳ類それぞれと組み合わせると考える。ただし、平瓦Ⅲb類については丸瓦Ⅲ類と組んで葺いた場合、平瓦は僅か幅5cm程度しか目視できず、全体として丸瓦が密に並列するやや特異な屋根景観を復元することになる。むしろ、平瓦Ⅲb類は丸瓦Ⅳ類と組み合わせるとみるべきかもしれない。

さて、前節で示したとおり、出土した須恵器から窯は窯3→窯1→窯2の順に築造されたとみられ、瓦は窯1古段階から小規模な生産が始まり、窯2において生産量を飛躍的に伸ばしたようすが窺える。そこで、平瓦について分類別の出土数量をみると、Ⅰ～Ⅳ類とも窯1新段階から出土し、その後、窯2古段階、新段階にかけても大きく出土比率を変えていない状況が読み取れる(第284図)。つまり、法量の異なる瓦が同時期に製作されていた可能性が高い。全体の大きさがある程度復元可能な平瓦を

みる限り、法量には少なくとも大小2種類(大:平瓦Ⅰ～Ⅲa類、小:平瓦Ⅲb～Ⅳ類)の規格があり、さらにそれぞれ厚さの厚いものと薄いものが意図的に作り分けられていたと考える。

2 平・丸瓦の製作技法

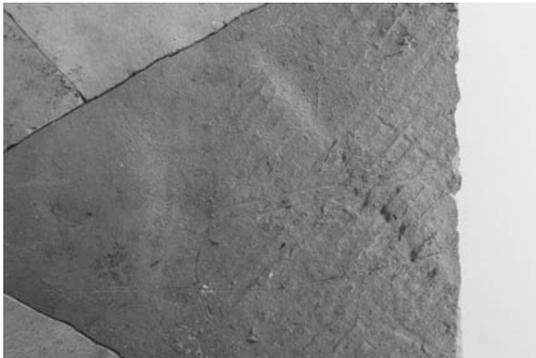
平瓦、丸瓦は整形、調整工程において共通した製作技法が用いられている。

まず、成形技法であるが、平瓦は凹面に模骨痕は見られず、すべて一枚作りと考えられる。側面が鉛直ではなく、円弧の中心を向くことが問題となるが、側面に凹面の布目が回り込むものが僅かながら確認できる。したがって、側面部分までが彫り込まれた凸型の成型台が用いられた可能性が高いと考える。丸瓦のうちⅠ、Ⅱ類に関しては資料数が少ないが、円筒形の型木に粘土を貼り付け、半裁する成形技法が用いられたと考えられる。一方、丸瓦Ⅲ、Ⅳ類は特異で、横断面形が半円に満たず、曲率が弱いものが多くみられる。平瓦と同様に凸型の成型台による一枚作りの可能性も考えておきたい。

次に、凸面整形は確認できた資料は僅かしかないが、基本的に平行タタキ1種類のみと考えられる(写真8)。この平行タタキは本窯跡で焼成された須恵器の甕瓶類にみられる細かなタタキ目のものであり、同一の原体が用いられた可能性が高い。確実にタタキ目を確認できたのは平瓦Ⅱ～Ⅳ類であるが、平瓦Ⅰ類や丸瓦についても調整技法が酷似することなどから、同様の平行タタキによる凸面整形が施されたとみてよさそうである。

最後に仕上げとなる調整については、タテ方向の粗雑なナデが主体である。ナデにはかきべら状の工具が用いられた可能性が高く、整形時のタタキ目を全面的に消している。なかには比較的丁寧なケズリを施すものもあるが、多くはナデやケズリに加え、指オサエが混在し、工具の圧痕など傷跡も目立つ。これらの調整は凸面を平滑に整えるというよりは、むしろ、タタキ目を消すことだけに主眼が置かれた感があり、強いナデや指オサエが原因で変形しているものも少なくない。また、凹面もナデ調整により布目が消されている点も特筆される。ナデ調整は凸面同様に粗雑で、ナデ消す部位に法則性等は読み取れない。

以上、平瓦と丸瓦の製作技法をみたが、凸面整形に須恵器と同じタタキ原体を用いる点とタテ方向の粗雑なナデにより調整を施す点に最大の特徴がある。このことから、まず、本遺跡における瓦製作には須恵器工人が大きく関与したことが窺える。さらに言及するならば、作りの稚拙さからみて実際の製作に従事したのも瓦工人ではなく、須恵器工人が主体であった可能性が高いと考える。一方で、成型台による一枚作りなどは専門的知識や技術を要すると考えられ、瓦の生産開始にあたっては招聘された瓦工人による一定の技術指導や伝習が行われた可能性があるだろう。

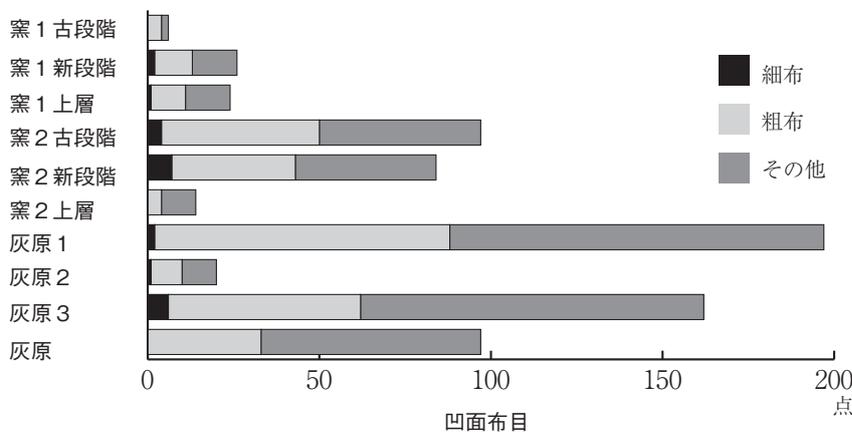
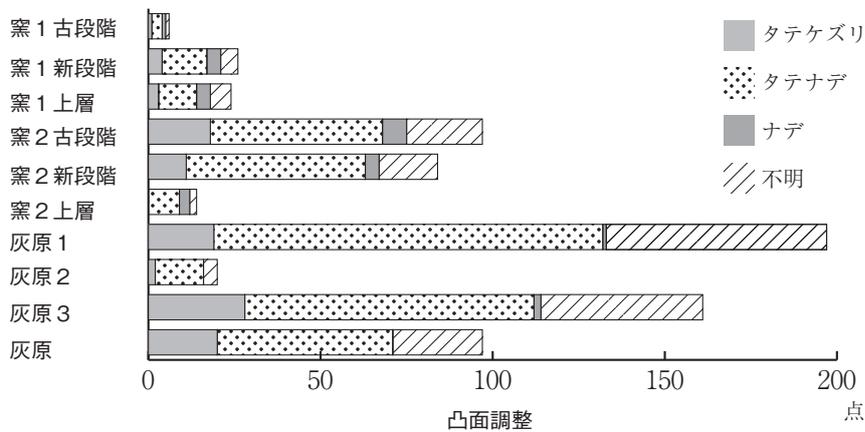
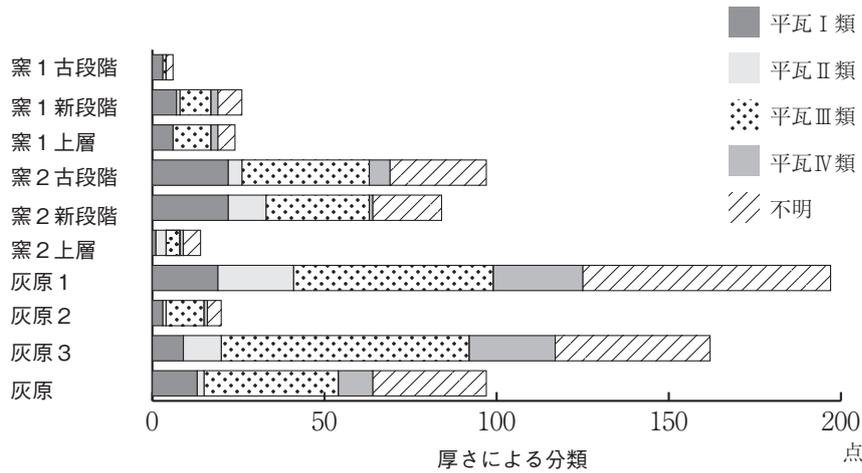
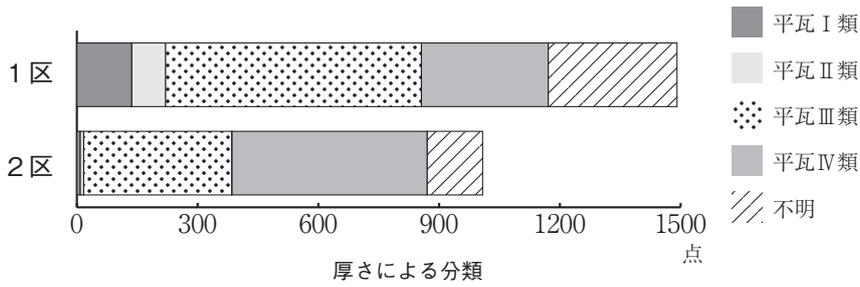


255(第113図)

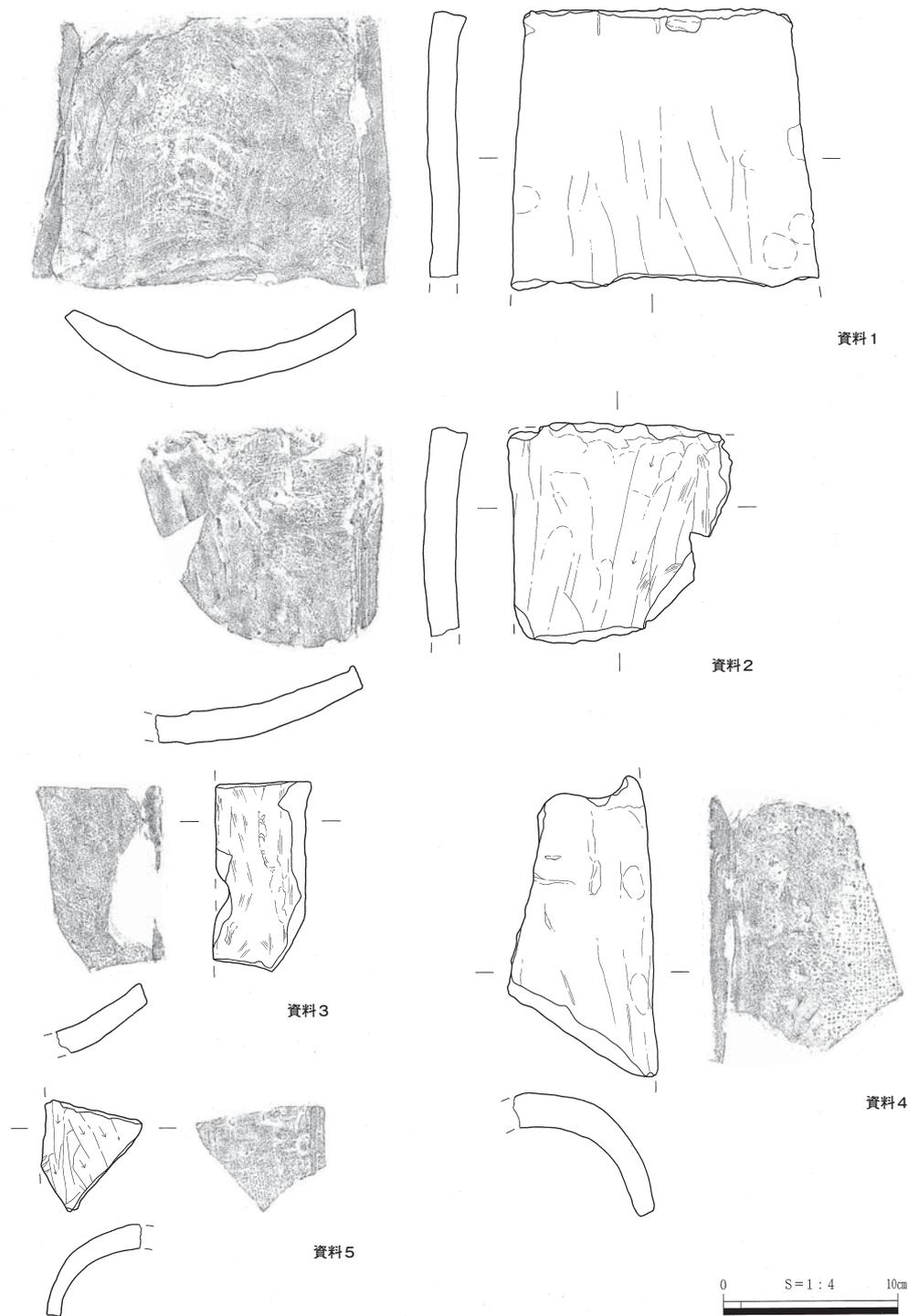


558(第150図)

写真8 平瓦凸面タタキ整形痕



第284図 平瓦数量組成



第285図 上淀麿寺出土瓦

米子市教育委員会所蔵の未報告資料を実測

3 供給先の検討

本遺跡は伯耆国汗入郡に属し、郡内には高田原麿寺、上淀麿寺の2つの古代寺院が知られる。まずは、これらの寺院が供給先の第一候補といえるため、平瓦を中心に比較する。

高田原麿寺

平瓦のほとんどが凸面全体にヨコ方向の丁寧なナデ調整が施すものである。タタキ目は確認できていないが、上淀麿寺の平瓦A類と同じ製作技法と考えられる²⁾。成形は凹面の模骨痕から桶巻き作りである。高田原麿寺は出土した軒丸瓦がいわゆる上淀麿寺式軒丸瓦の一型式のみであり、7世紀後半



写真9 上淀麿寺出土平瓦・資料1 米子市教育委員会所蔵資料を撮影

に造営された、単独ないしは少数の堂宇からなる小規模な寺院と考えられている(山中1995)。平瓦の様相も単一的で、本窯跡が操業する9世紀後半まで存続したとは考えられない。

上淀麿寺

平瓦は製作技法からA～C類の3種類に分類し報告されている(淀江町教育委員会1995)。報告ではこれらに加え、ハケ調整を施すものなども存在するとされるが、今回新たにもう一種類の平瓦を確認することができた(第285図)。本稿では、便宜的に平瓦D類としておく。各分類の特徴は以下のとおりである。

平瓦A類 凸面全体にヨコ方向の丁寧なナデ調整を施し、タタキ目を消すものである。タタキは平行タタキなどで須恵器の甕瓶類と同じ原体と考えられる。成形は桶巻き作りである。法量は側面長40cm前後、広端長27～29cm前後、狭端長21～25cm前後で、厚さは2.0cm程である。

平瓦B類 凸面整形が格子タタキのものである。成形は桶巻き作りである。タタキは原体の違いにより、数種類に細分可能とされる。法量は側面長35cm前後、広端長28cm前後、狭端長25cm前後で、厚さは2.0cm程である。

平瓦C類 凸面整形が縄タタキのものである。成形は一枚作りである。法量は側面長39cm前後、広端長28cm前後、狭端長25cm前後で、厚さは2.0～2.5cmである。

平瓦D類 凸面にタテ方向の工具による粗雑なナデ調整を施し、タタキ目を消すものである。ヘラケズリや指オサエが混在するものもある。タタキ目は明確に確認できていないが、須恵器甕瓶類と同じ平行、ないしは格子状のタタキであろう。成形は一枚作りで、側面に布目を残すものも確認できた。胎土は緻密で、あまり砂粒を含んでいない。

第285図資料1～3が平瓦、資料4、5が丸瓦である。資料1は、金堂北側付近から出土した平瓦で、広端部側を欠損しているが、全体の形状が窺える資料である(写真9)。法量は狭端長15.4cm、厚さ1.9cm前後で、本遺跡の平瓦Ⅲb類と同一法量である。凸面は雑なタテナデで、タタキ目は確認できない。側面調整はケズリであるが、狭端面は未調整である。凹面の布目は荒く、全面にナデ消されている。焼成は須恵質だが、二次焼成を受けている可能性がある。資料2は凹面が全体的にナデ消され、狭端面は未調整で雑なつくりとなる。資料3、5は厚さが1.4cmと薄い。

以上の観察から、平瓦D類は本遺跡の平瓦と製作技法が一致することが分かる。さらに、法量、焼成、胎土も酷似しており、本遺跡の瓦が上淀麿寺に供給された可能性は高いと考える。窯1、2の操業は9世紀後半の短期間であり、前節で検討したように瓦の生産規模は大きいとはいえない。上淀麿寺における平瓦D類の出土比率を示せるわけではないが、実見した瓦に占める割合が僅かであったこ

とからみてもそれは明らかであろう。よって、本遺跡の瓦生産は上淀廃寺の需要に応じた臨時的な生産とみられ、供給された瓦は補修瓦として用いられたと考えられる。

ところで、上淀廃寺の創建時に使用された平瓦は軒平瓦との関係等から平瓦A類が主体と考えられ、先述のとおり高田原廃寺の平瓦とも製作技法が一致する²⁾。また、平瓦A類にやや後出すると考えられる平瓦B類の格子タタキには瓦用に製作された原体ではなく、須恵器と同じタタキ目の細かいものが存在する。つまり、上淀廃寺の瓦作りには当初から須恵器工人が大きく関与していたことが分かる。それは「山陰型鴟尾」と呼ばれる陶製の鴟尾にも窺うことができ、内外面には平行タタキや同心円の当て具痕がみられ、焼成も須恵質で硬質なつくりとなる。こうした須恵器工人の強い関与は少なくとも隣接する八橋郡の斎尾廃寺や会見郡の大寺廃寺などではみられないようであり、汗入郡における瓦生産の特色の一つであった可能性もあろう³⁾。したがって、平安時代に行われた本遺跡の瓦生産は汗入郡の伝統的な製作技法や窯業体制を踏襲するものであったと評価できるのかもしれない。

4 平瓦Ⅰ・Ⅱ類の評価

平瓦Ⅰ・Ⅱ類は通常の平瓦よりも分厚く、Ⅰ類のなかには厚さが5cm前後のものや重量が10kgに及ぶものまである。このことから通常の平瓦とは考えにくく、一つの可能性として素文軒平瓦としての使用方法が想定できる。平瓦の出土枚数を偶数から算出すると遺跡全体で122枚であり、そのうち平瓦Ⅰ類が11枚、Ⅱ類が6.25枚となり合わせても2割に満たない。こうした生産比率の少なさも平瓦としての特異な性格を示唆するものと考えられる。

そこで、上淀廃寺の軒平瓦をみると、5型式6類の軒平瓦が確認されている。そのうち、創建瓦の軒平瓦K Y H I類は瓦当面に文様を持たない素文のものである。凸面広端側に櫛描波状文を施す顎面施文を持ち、出土量は軒平瓦全体の76%を占めている。その後、8世紀前葉から中葉にかけて大規模な補修が行われたとみられ、中原齊氏はこの時期の軒丸瓦K Y MⅡ類に伴う軒平瓦として重弧文や重画文軒平瓦を挙げたうえで、「軒平瓦の分類に含めていない厚手無文平瓦」の存在を指摘する(中原1995)。確かに軒丸瓦K Y MⅡ類に対する重弧文及び重画文軒平瓦の出土数は圧倒的に少なく、補修瓦として用いた素文軒平瓦はさらに多く見積もる必要があるだろう。よって、上淀廃寺に葺かれた軒平瓦は創建から8世紀代の補修を経てなお、無文を基調とし続けた可能性がある。これは伯耆国における他の古代寺院がしだいに華やかな唐草文軒平瓦などで飾られるようになるのとは対照的な屋根景観といえよう。

このようにみると、本窯から瓦が供給された9世紀後半の補修時においても素文軒平瓦の代替品が必要とされた可能性は十分にあり、それが平瓦Ⅰ・Ⅱ類であったとみたい。その場合、塔であれば、初層より上に葺かれていた顎面施文をもつ素文軒平瓦や重弧文軒平瓦等を初層に葺き替え、平瓦Ⅰ・Ⅱ類のような単に平瓦を厚くしたのみの瓦で上層を補修した可能性も十分に考えられるのではなかろうか⁴⁾。平瓦Ⅰ・Ⅱ類を無文軒平瓦とすると、組み合う軒丸瓦が問題となる。この点に関して軒丸瓦は瓦範を必要とするため、瓦範を所有する別の瓦屋で製作された可能性がまず挙げられる。しかし、瓦厚を基準にした分類で示したとおり平瓦Ⅰ・Ⅱ類と組み合うように丸瓦Ⅰ・Ⅱ類が存在することから、むしろ、丸瓦Ⅰ・Ⅱ類についても軒丸瓦として代用された可能性があるのではなかろうか。丸瓦Ⅰ・Ⅱ類は出土量が僅かしかなく、全体法量が復元できる資料もないため、今後供給先の上淀廃寺でのセット関係から明らかにすべき課題であろう。

5 補修された上淀廃寺の屋根景観

7世紀末に創建された上淀廃寺は従来、8世紀代に大規模な改修をした後、10世紀後半頃の廃絶に至るまで本格的な補修が行われなかったとされてきたが、本窯の供給により9世紀後半に小規模ながら一度補修が行われた可能性が高まったといえる。このことから上淀廃寺の変遷についてまとめたのが表103である。では、この9世紀後半に行われた2度目の補修はどのようなものであったのだろうか。まず、8世紀後半から9世紀初頭には中塔後方の段丘上に建てられた経蔵あるいは鐘楼(鼓楼)とされる建物S B 105が廃絶したと考えられている。また、寺域北限溝S D 7も9世紀には埋没し機能していないとみられ、平安時代に入り伽藍周辺施設から急激に衰退し始めたとされる。さらに、10世紀後半頃の廃絶時には金堂及び中塔、南塔が火災により同時に焼失したことが明らかとなっている。これらを勘案すると、9世紀後半において中心伽藍は維持されていたと考えられるが、周辺施設の多くは機能を失い、伽藍自体も損傷し始めていたと予想される。こうした最中の補修であり、出土瓦から補修された建物の特定やその内容を検討していく必要はあるが、供給された瓦はそれ以前の瓦と比較すると極めて粗雑なつくりで、軒平瓦も平瓦Ⅰ・Ⅱ類を想定した場合、単なる分厚い平瓦でとても軒平瓦と呼べるような代物ではなかった。よって、補修によりかろうじて体裁を取り繕ったものの、もはや、律令体制のもと地方支配の象徴ともなった寺院の壮麗な屋根景観にはほど遠いものであったに違いない。

以上、平瓦と丸瓦の製作技法をもとに本遺跡から上淀廃寺への瓦供給を考えた。もちろん、供給先は一つと限らず、今回、汗入郡内の古代寺院のみとの比較にとどまったが、今後は伯耆国内における他郡の官衙や寺院を含めた、より多角的な検討をしていく必要であろう。伯耆国の主要寺院はその多くが10世紀頃まで存続したとされるが、当該期の瓦生産や供給が明らかとなった例はなく、律令制の崩壊とともに荒廃する地方寺院の一端をも垣間見ることができた意義は少なくないと考ええる。

表103 上淀廃寺の変遷案

年代		軒丸瓦	軒平瓦	平瓦	瓦窯
7世紀末	創建期	上淀廃寺式軒丸瓦 (K Y M I類)	素文軒平瓦(K Y M I類)	平瓦A類	小枝山瓦窯など
8世紀前葉～中葉	補修期	国分寺系瓦 (K Y M II類)	重弧文軒平瓦(K Y M II～IV類) 重画文軒平瓦(K Y M V類) 素文軒平瓦(「厚手無文平瓦」)	平瓦B類 平瓦C類	
9世紀後半	補修期		素文軒平瓦(平瓦Ⅰ・Ⅱ類?)	平瓦D類 (平瓦Ⅲ・Ⅳ類)	下市築地ノ峯東通第2遺跡

【註】

- 1) 出土した瓦を評価するにあたり山陰古瓦研究会の諸氏からさまざまなご意見をいただいた。
- 2) 胎土分析では上淀廃寺の創建瓦と同一の窯で焼成された可能性が指摘されている(三辻1995)。
- 3) 窯1から瓦製相輪(九輪)とみられる資料(第90図147)が出土している点も興味深い。瓦製、または陶製相輪は石川県池崎窯跡、戸津31号窯、鳥根県天王平廃寺、広島県横見廃寺などに出土例がある(上野1986, 稲垣1979)。
- 4) 中原斉氏は創建時における軒平瓦の使用方法として、塔であれば初層に重弧文軒平瓦を、上層に素文軒平瓦を葺く使い分けの可能性も示唆している(中原1995)。

【引用参考文献】

- 稲垣晋也1979「その他の建築資材」『新版考古学講座』第7巻 有史文化・下 雄山閣出版
 上野章1986「相輪について」『小杉流通業務団地内遺跡群』富山県埋蔵文化財センター
 鳥取県淀江町教育委員会1995『上淀廃寺』
 中原斉1995「上淀廃寺伽藍の創建と変遷～軒瓦の変遷を中心に～」『上淀廃寺』鳥取県淀江町教育委員会
 三辻利一1995「蛍光X線分析」『上淀廃寺』鳥取県淀江町教育委員会
 山中敏史1995「上淀廃寺創建の背景と汗入郡衙」『上淀廃寺』鳥取県淀江町教育委員会